

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

令和3年度

令和4年7月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	-----	1
2	位置	-----	1
3	土壌	-----	1
4	土地面積および利用区分	-----	1
5	機構	-----	2
6	職員	-----	2
7	建物	-----	4
8	新たに設置した主要施設および備品	-----	4
9	決算	-----	6

II 作況

1	気象経過	-----	7
2	当場の作況	-----	10

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	-----	22
	1) 麦類に関する試験	-----	22
	2) 畑作物に関する試験	-----	22
	3) ばれいしょに関する試験	-----	22
	4) 牧草・飼料作物に関する試験	-----	23
	5) 栽培環境に関する試験	-----	23
	6) 病害虫に関する試験	-----	24
	7) 地域支援活動	-----	24
2	技術普及室の活動	-----	24

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表		
	1) 研究論文	-----	28
	2) 口頭発表	-----	28
	3) 専門雑誌記事	-----	29
	4) 著編書・資料	-----	30
	5) 新聞記事	-----	30
2	普及事項		
	1) 普及奨励事項	-----	30
	2) 普及推進事項	-----	30
	3) 指導参考事項	-----	30
	4) 研究参考事項	-----	30
3	品種登録・特許申請	-----	30

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議	-----	31
2 各種委員会	-----	31
3 刊行印刷物	-----	34
4 広報活動	-----	34
5 見学受入れ	-----	34

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ	-----	35
2 講師派遣	-----	35
3 職員研修	-----	35
4 職場研修	-----	36
5 国際交流	-----	36

VII その他

1 技術体系化チーム	-----	37
2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	37
3 表彰・受賞	-----	37
4 行事	-----	38
5 自己点検への対応	-----	39
6 建物配置図	-----	40
7 圃場配置図	-----	41

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫害予察科を病虫害科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅停留所から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

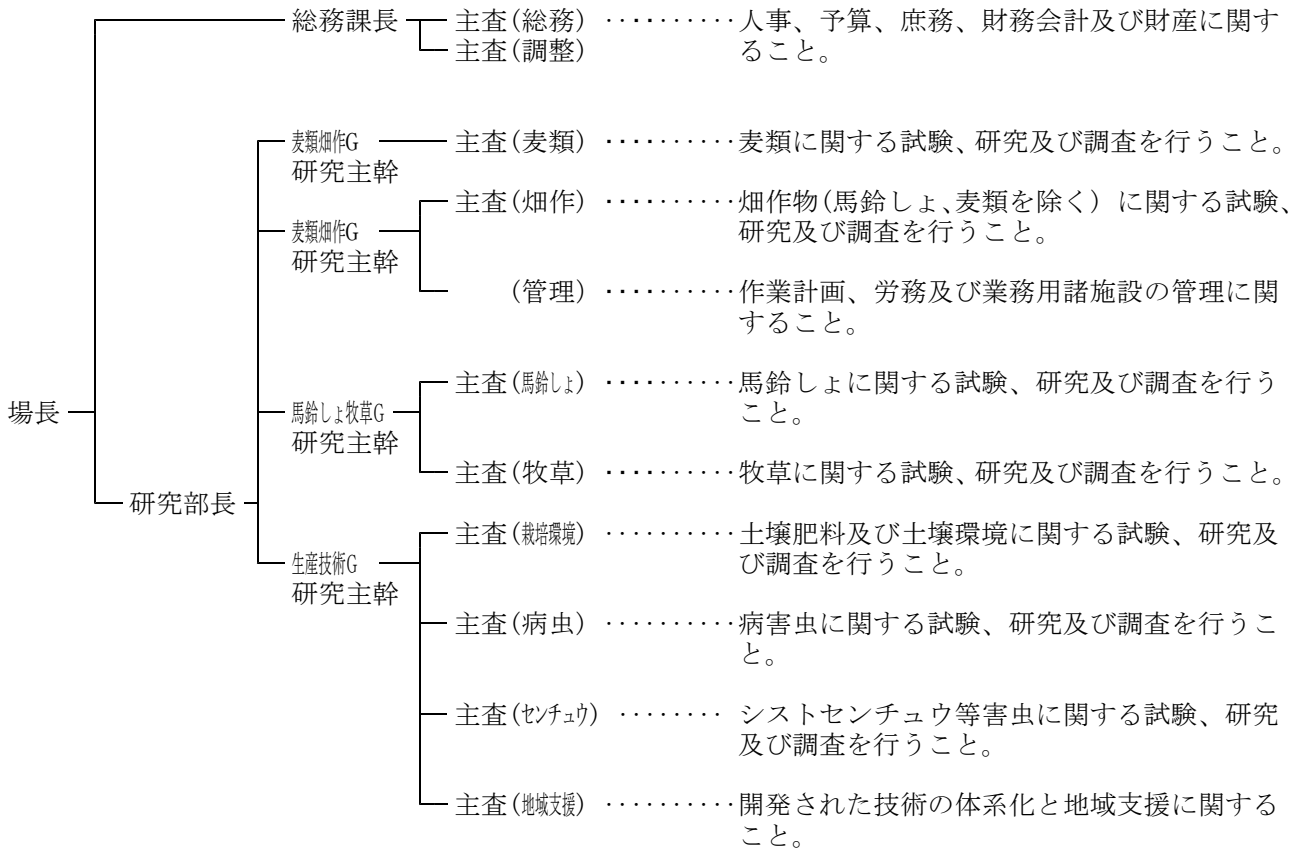
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁 舎 、 建 物 敷 地	118,564
公 宅 用 地	44,151 (道財産)
道 路 、 用 排 水 路	42,383
山 林	300,400
試 験 ほ 場 (畑)	709,705
” (隔離ほ場)	73,260
原 野 、 そ の 他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)
 上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(普及指導) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

令和4年3月31日現在

グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 畑 作 G			馬 鈴 し ょ 牧 草 G		生 産 技 術 G			総務課	合 計	技 術 普 及 室
				麦 類	畑 作	管 理	馬 鈴 し ょ	牧 草	栽 環	病 虫	支 援			
研究職	1	1	4	6	2		4	3	4	4	1		30	
行政職						4						5	9	3
計	1	1	4	6	2	4	4	3	4	4	1	5	39	3

(2) 令和4年3月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	法人職員	梶山 努	(馬鈴しょ牧草G) 研究主幹	法人職員	平井 剛
総務課長 (総務)	北海道職員	森 光 治	主査(馬鈴しょ)	"	藤田 涼平
主査(調整)	"	藤田 賢司	研究主任	"	品田 博史
専門主任	"	松島 英明	研究職員	"	和崎 文浩
技師	"	杉本 義則	専門研究員	"	松永 憲司
	"	門 なつみ	主査(牧草)	"	飯田 利紀
			研究主任	"	足高 和聡
			研究職員	"	高 聡史
<研究部> 研究部長 (麦類畑作G)	法人職員	岩崎 暁生	(生産技術G) 研究主幹	法人職員	柳田 大介
研究主幹	法人職員	荒木 和哉	主査(栽培環境)	"	酒井 稔信
研究主幹	"	鈴木 剛	研究主査	"	木場 稔星
主査(麦類)	"	大西 志全	研究主任	"	唐 原 萌
研究主査	"	木内 均	研究主任	"	桑 玲奈
研究主任	"	足利 奈奈	主査(病虫)	"	小倉 将陽
"	"	其田 達也	主査(センチュウ)	"	小野寺 鶴
研究職員	"	林 和希	研究職員	"	佐々木 太
"	"	佐藤 優美	専門研究員	"	池谷 美奈
主査(畑作)	"	池谷 聡子	主査(地域支援)	"	田中 一
研究主任	"	田澤 暁雄			
専門主任	"	伊藤 幸雄	(道技術普及室) 上席普及指導員	北海道職員	上堀 孝之
技師	"	井口 岳人	主任普及指導員	"	添島 均
"	"	中出 秀信	主査(普及指導)	"	小山 拓也
"	"	横川 愁斗			

(3) 転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
場長	梶山 努	3. 4. 1	中央農業試験場から
研究部長	岩崎 暁生	3. 4. 1	中央農業試験場から
研究主幹(生産技術)	柳田 大介	3. 4. 1	花・野菜技術センターから
技師	門 なつみ	3. 4. 1	十勝総合振興局から
研究職員	高 聡史	3. 4. 1	新規採用
(道技術普及室) 上席普及指導員	上堀 孝之	3. 4. 1	農政部技術普及課から
主任普及指導員	添島 均	3. 4. 1	石狩農業改良普及センターから

(4) 転出者および退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究部長	江部 成彦	3. 4. 1	中央農業試験場へ
研究主幹	五十嵐 俊成	3. 4. 1	中央農業試験場へ
場長	清水 基滋	3. 3. 31	退職
主任主査(牧草)	佐藤 公一	3. 3. 31	退職
技師	木村 祐介	3. 3. 31	退職
(道技術普及室) 主任普及指導員	外山 直樹	3. 4. 1	網走農業改良普及センターへ
上席普及指導員	氏家 俊	3. 3. 31	退職

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(m ²)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	現契約職員詰所
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫(馬鈴しょ)	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施 設

該当なし

(2) 備 品

名 称	形 式	金 額 (円)	配 置
てん菜分析機器基板		1,573,000	麦類畑作G
小型色彩選別器	アルソマック LAK350	1,483,000	麦類畑作G
ドウコンデショナー2台	戸倉商事 HEE5-S2	2,695,000	麦類畑作G
大型熱風強制循環式乾燥機	いすゞ VTRL-2880-2T	3,740,000	馬鈴しょ牧草G
超低温フリーザー	PHC MDF-DU300H-PJ	1,268,300	生産技術G
プロボックス	トヨタ 1UDSJ140A30201	1,870,800	総務課
種子測定器	MARVITECH MARVIN	2,200,000	麦類畑作G
ラボ用脱穀機	パーカー LD180	2,365,000	麦類畑作G
異物除去装置	Pfeuffer SLN3	2,255,000	麦類畑作G
ウエザーバケット	ウエザーバケット TA-WL-2SG	795,850	生産技術G
自動体外除細動器AED	フクダ電子 HS1+e	198,000	総務課
簡易水洗洋式便器樹脂型	日野興業 GX-WCP	335,500	麦類畑作G
パソコン	HP EliteDesk 800 G6 SFF/CT	159,500	麦類畑作G
パソコン	マイクロソフト SurfacePro7	156,200	馬鈴しょ牧草G
ワンタッチテント3030	アズワン 天幕ブルーアルミ脚DX-A	117,150	麦類畑作G
エアコン	SHARP AY-N36DM	233,200	総務課
常用モア	共立 RM831G/B	495,000	麦類畑作G
ニンジン洗浄機	サシナミ CW120-8	481,800	麦類畑作G
ティシュー・テックパラフィン ン伸展機	サクラファインテック	216,000	生産技術G
冷却コイル	ヤマト科学	350,900	麦類畑作G
スーパーカブ50 5台	ホンダ C50JJJ	1,237,500	麦類畑作G 馬鈴しょ牧草G
平うねロータリーマルチ	ヤンマー 7S0455-00840	198,000	麦類畑作G
カラーレーザープリンター	キャノン LBP841C	129,800	生産技術G
データロガー 5台	METER ZL6	522,500	生産技術G
物置	イナバ SMK-25SGMN	486,200	総務課
送風低温恒温器	ヤマト科学 DKM600	223,960	総務課
Apogeeハンディ光量子計フル 波長センサー	セネコム SE-MQ500	107,800	生産技術G
キッチンエイドミキサー	キッチンエイド KSM150ホワイト	107,800	麦類畑作G
エアコン 2台	東芝 RAS-4011TL	473,000	生産技術G
冷蔵庫	シャープ SJPD31HB	141,030	麦類畑作G
オプトリーフ測定器	大成ファインケミカル RYO-470M	220,000	生産環境G

9 決 算（支出額）

（単位：円）

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	500,000	500,000	0	
重 点 研 究 費	2,412,000	2,184,539	227,461	R4年度へ繰越
職 員 研 究 奨 励 費	3,610,000	3,610,000	0	
経 常 研 究 費	21,420,000	20,573,392	846,608	
依 頼 試 験 費	0	0	0	
研 究 開 発 推 進 費	0	0	0	
技 術 普 及 指 導 費	222,000	222,000	0	
研 究 用 備 品 整 備 費	1,573,000	1,573,000	0	
維 持 管 理 経 費（研究）	725,000	725,000	0	
研 究 用 備 品 整 備 費（積立金）	0	0	0	
維 持 管 理 経 費（一般）	25,334,000	24,811,801	522,199	
研 究 関 連 維 持 管 理 経 費	1,096,000	1,096,000	0	
知 的 財 産 経 費	0	0	0	
運 営 経 費	39,318,025	37,931,476	1,386,549	
共 同 研 究 費	8,600,000	8,600,000	0	
国 庫 受 託 研 究 費	2,320,000	2,180,000	140,000	
道 受 託 研 究 費	3,211,000	3,210,128	872	
そ の 他 受 託 研 究 費	62,286,000	62,276,267	9,733	
そ の 他 補 助 金	25,568,000	25,568,000	0	
施 設 整 備 費 補 助 金	0	0	0	
施 設 整 備 費（繰越積立金）	416,000	415,800	200	
科 学 研 究 費 補 助 金	904,000	904,000	0	
合 計	199,515,025	196,381,403	3,133,622	

※ 人件費（研究職員費・派遣職員費・準職員費）を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬が極めて高く、下旬が低かった。月平均気温は5.42℃で平年よりやや高かった(+0.7℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬・下旬とも極めて多く、月合計は108.0mmで平年より極めて多かった(+60.6mm)。日照時間は上旬が少なく、中旬・下旬とも平年並で、月合計は188.9時間で平年並であった(-0.5時間)。

5月：平均気温は上旬が平年よりやや低く、中旬が高く、下旬が低かった。月平均気温は10.5℃で平年よりやや低かった(-0.6℃)。降水量は上旬が少なく、中旬が多く、下旬は極めて多く、月合計は78.5mmで平年より多かった(+23.2mm)。日照時間は上旬・中旬が平年並、下旬が少なく、合計は118.9時間でやや少なかった(-66.1時間)。

6月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬・下旬とも極めて高かった。月平均気温は16.6℃で平年より高かった(+1.8℃)。降水量は上旬が平年並、中旬がやや少なく、下旬が少なく、月合計は54.5mmで平年よりやや少なかった(-30.3mm)。日照時間は上旬が多く、中旬がやや多く、下旬が多く、月合計は247.1時間で多かった(+89.8時間)。

7月：平均気温は上旬が平年並で、中旬・下旬とも極めて高かった。月平均気温は22.6℃で平年より極めて高かった(+3.2℃)。降水量は上・中・下旬とも平年より少なく、月合計は10.0mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年並、中旬が多く、下旬が極めて多く、月合計は263.8時間で平年より多かった。

8月：平均気温は上旬が平年より高く、中旬が極めて低く、下旬がやや高かった。月平均気温は19.5℃で平年並であった(-0.2℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬・下旬とも少なく、月合計は165.5mmで平年並であった(+3.4mm)。日照時間は上旬がやや少なく、中旬・下旬ともやや多く、月合計は151.7時間で平年並であった(+12.1時間)。

9月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬が低く、下旬がやや高かった。月平均気温は14.9℃で平年よりやや低かった(-1.2℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬がやや少なく、下旬が多く、月合計は87.0mmで平年よりやや少なかった(-31.9mm)。日照時間は上旬が平年並で、中旬が多く、下旬が平年並で、月合計は180.1時間で平年並であった(+28.2時間)。

10月：平均気温は上旬が平年より極めて高く、中旬がやや高く、下旬が平年並であった。月平均気温は9.2℃で平年よりやや高かった(+0.7℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬・下旬とも多く、月合計は89.0mmで平年並であった。日照時間は上旬・中旬・下旬とも平年並で、月合計は147.2で平年並であった(-20.6時間)。

11月：中旬までの平均気温は5.1℃で、平均気温は上旬・中旬ともに平年より高かった(+2.1℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬が少なく、中旬までの合計は150.5mmで平年より多かった(+114.6mm)。日照時間は上旬が少なく、中旬が平年並で、中旬までの合計は63.2時間でやや少なかった(-25.1時間)。

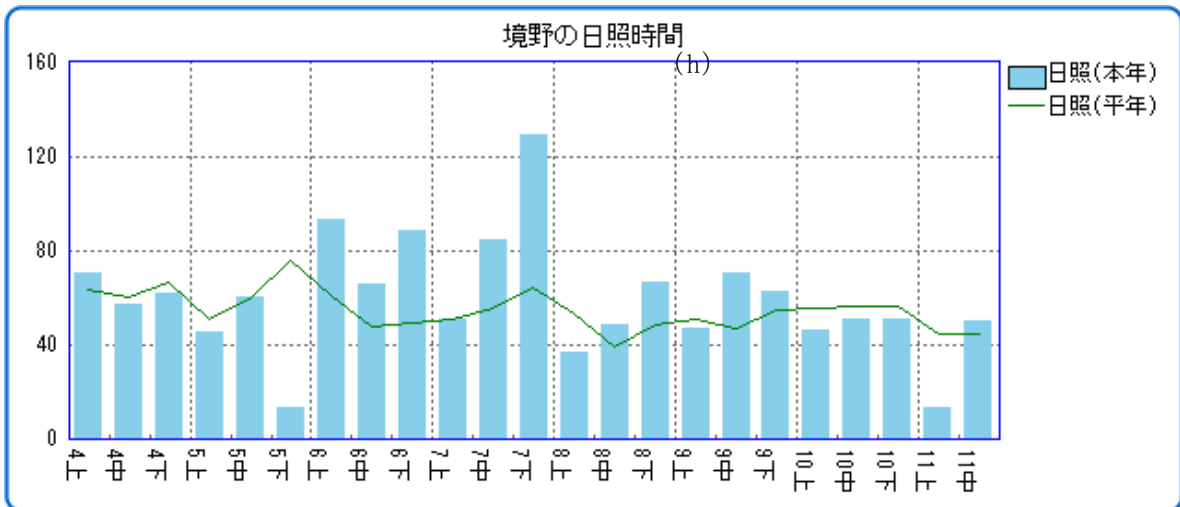
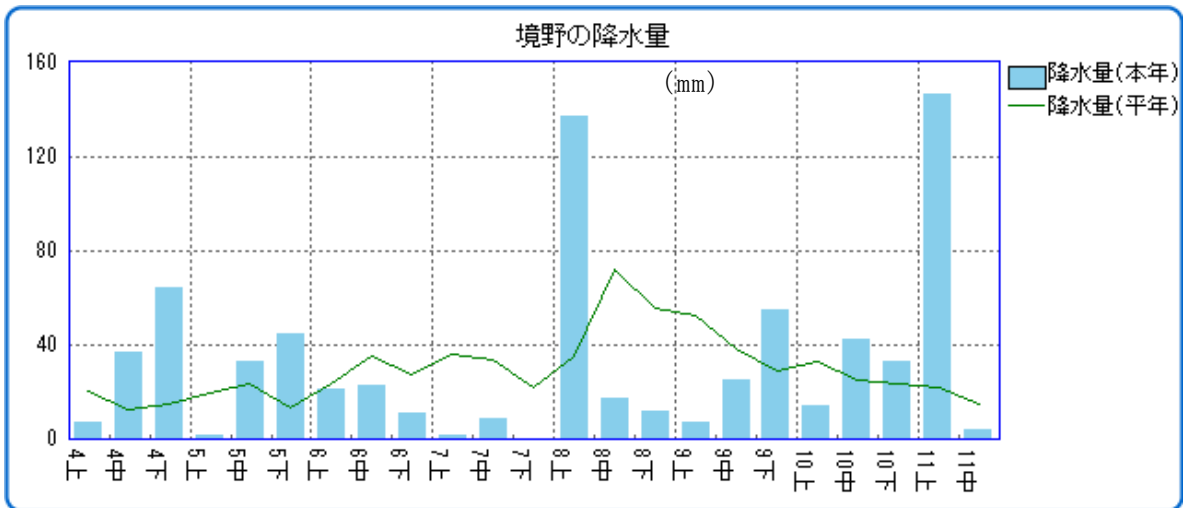
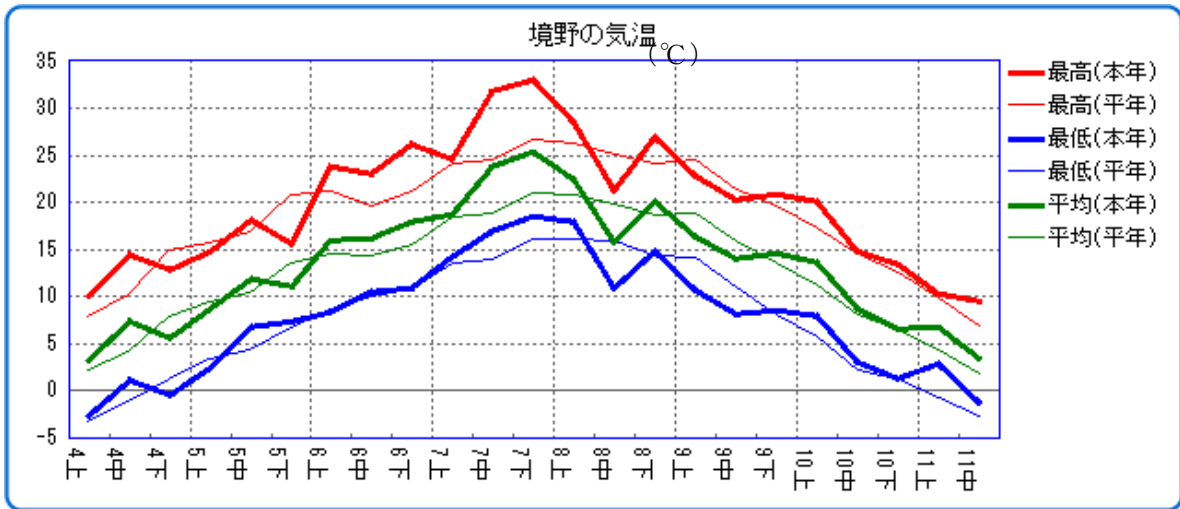
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気温：5月はやや低く、6月は高く、7月は極めて高く、8月は平年並、9月はやや低かった。この期間の日平均気温の積算値は2578.9℃であった(平年差+95.0℃、平年比104%)。

降水量：5月は多く、6月はやや少なく、7月は少なく、8月は平年並、9月はやや少なかった。この期間の降水量の積算は395.5mmであった(平年差-116.7mm、平年比77%)。

日照時間：5月はやや少なく、6月・7月は多く、8月・9月は平年並であった。この期間の日照時間の積算は961.6時間であった(平年差157.7時間、平年比120%)。

2) 気温、降水量及び日照時間の平年との比較



3) 気象表

年月	旬	平均気温(°C)			最高気温(°C)			最低気温(°C)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
4月	上旬	3.2	2.2	1.0	10.0	7.9	2.1	-2.6	-3.3	0.7	6.5	20.2	-13.7	70.3	63.2	7.1
	中旬	7.4	4.2	3.2	14.4	10.1	4.3	1.0	-1.2	2.2	37.0	12.3	24.7	56.8	60.3	-3.5
	下旬	5.6	7.8	-2.2	12.7	15.0	-2.3	-0.5	1.1	-1.6	64.5	14.9	49.6	61.8	66.0	-4.2
5月	上旬	8.6	9.4	-0.8	14.7	15.7	-1.0	2.5	3.4	-0.9	1.5	18.9	-17.4	45.4	50.5	-5.1
	中旬	11.9	10.3	1.6	18.1	16.9	1.2	6.7	4.3	2.4	32.5	23.1	9.4	60.0	59.2	0.8
	下旬	11.1	13.5	-2.4	15.5	20.8	-5.3	7.3	6.7	0.6	44.5	13.3	31.2	13.5	75.3	-61.8
6月	上旬	15.9	14.5	1.4	23.8	21.2	2.6	8.3	8.6	-0.3	21.0	22.8	-1.8	92.9	60.9	32.0
	中旬	16.2	14.4	1.8	22.9	19.6	3.3	10.4	10.0	0.4	22.5	34.9	-12.4	65.7	47.7	18.0
	下旬	17.9	15.5	2.4	26.1	21.1	5.0	10.9	10.7	0.2	11.0	27.2	-16.2	88.5	48.7	39.8
7月	上旬	18.6	18.5	0.1	24.5	24.2	0.3	14.2	13.6	0.6	1.5	36.0	-34.5	50.4	50.7	-0.3
	中旬	23.8	18.8	5.0	31.8	24.5	7.3	16.9	14.0	2.9	8.5	33.2	-24.7	84.2	55.5	28.7
	下旬	25.3	20.9	4.4	32.9	26.6	6.3	18.4	16.1	2.3	0.0	21.8	-21.8	129.2	63.9	65.3
8月	上旬	22.5	20.7	1.8	28.4	26.3	2.1	17.9	16.1	1.8	137.0	34.6	102.4	36.3	52.6	-16.3
	中旬	15.8	19.9	-4.1	21.3	25.1	-3.8	10.9	15.8	-4.9	17.0	72.0	-55.0	48.8	39.0	9.8
	下旬	20.1	18.7	1.4	26.9	24.2	2.7	14.8	14.3	0.5	11.5	55.5	-44.0	66.6	48.0	18.6
9月	上旬	16.3	18.9	-2.6	22.8	24.5	-1.7	10.7	14.1	-3.4	7.0	52.3	-45.3	46.5	50.7	-4.2
	中旬	14.0	15.8	-1.8	20.2	21.4	-1.2	8.1	11.0	-2.9	25.0	38.0	-13.0	70.7	46.6	24.1
	下旬	14.5	13.5	1.0	20.9	19.7	1.2	8.5	8.0	0.5	55.0	28.6	26.4	62.9	54.6	8.3
10月	上旬	13.6	11.1	2.5	20.0	17.2	2.8	7.8	5.6	2.2	14.0	32.4	-18.4	45.7	55.5	-9.8
	中旬	8.7	8.0	0.7	14.8	14.6	0.2	2.9	2.2	0.7	42.0	24.9	17.1	50.5	56.0	-5.5
	下旬	6.5	6.5	0.0	13.3	12.5	0.8	1.3	1.1	0.2	33.0	23.2	9.8	51.0	56.3	-5.3
11月	上旬	6.7	4.4	2.3	10.3	9.9	0.4	2.7	-0.7	3.4	146.5	21.6	124.9	13.1	44.2	-31.1
	中旬	3.4	1.7	1.7	9.5	6.8	2.7	-1.4	-2.8	1.4	4.0	14.3	-10.3	50.1	44.1	6.0
4月		5.4	4.7	0.7	12.3	11.0	1.3	-0.7	-1.1	0.4	108.0	47.4	60.6	188.9	189.4	-0.5
5月		10.5	11.1	-0.6	16.1	17.9	-1.8	5.6	4.9	0.7	78.5	55.3	23.2	118.9	185.0	-66.1
6月		16.6	14.8	1.8	24.2	20.6	3.6	9.9	9.7	0.2	54.5	84.8	-30.3	247.1	157.3	89.8
7月		22.6	19.4	3.2	29.8	25.2	4.6	16.6	14.6	2.0	10.0	91.0	-81.0	263.8	170.1	93.7
8月		19.5	19.7	-0.2	25.6	25.2	0.4	14.5	15.4	-0.9	165.5	162.1	3.4	151.7	139.6	12.1
9月		14.9	16.1	-1.2	21.3	21.9	-0.6	9.1	11.0	-1.9	87.0	118.9	-31.9	180.1	151.9	28.2
10月		9.2	8.5	0.7	15.6	14.7	0.9	3.7	2.9	0.8	89.0	80.5	8.5	147.2	167.8	-20.6
11月(中旬まで)		5.1	3.0	2.1	9.9	8.4	1.5	0.6	-1.7	2.3	150.5	35.9	114.6	63.2	88.3	-25.1

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。10年平均は前10か年の平均値である。

4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初霜	根雪始	通常の根雪終	積雪期間	降雪終	耕鋤始	晩霜	初霜	無霜期間	降雪始
	(年.月.日)	(年.月.日)	(年.月.日)	(日)	(年.月.日)	(年.月.日)	(年.月.日)	(年.月.日)	(日)	(年.月.日)
本年	10/16	12/13	3/28	106	5/1	4/12	6/1	10/17	138	11/17
平年	10/13	12/5	4/8	125	4/26	4/25	5/7	10/13	159	11/3
比較	3	8	△ 11	△ 19	5	△ 13	25	4	△ 21	14

項目	平均気温 (°C)	降水量 (mm)	日照時間 (hr)
5月上旬 本年	2578.9	395.5	961.6
～ 10年平均	2483.9	512.2	803.9
9月下旬 比較	95	-116.7	157.7

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。平年値は前10か年の平均値である。

2 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦(令和2年9月播種)

作況: 良

事由: 播種期は平年並の9月16日であった。出芽期は平年より2日早い9月22日であった。出芽後の10月および11月上旬の平均気温はやや高く経過したため、越冬前の草丈、茎数は平年を上回った。根雪始は平年より8日遅い12月13日、根雪終は平年より11日早い3月28日で、根雪期間は平年より19日短かった。調査圃場は融雪材を散布したため、融雪期が根雪の観測地点より14日早い3月14日で、雪腐病の発生は認められなかった。

コムギ縞萎縮病が発生し、全ての反復で萎縮症状が認められた。出穂期は平年より2日遅い6月9日であった。登熟期間の6月中旬以降、気温は高く、降水量が少なく推移したため、登熟は極めて早まり、成熟期は平年より5日早い7月19日であり、登熟期間は平年より7日短かった。稈長、穂長は平年並で、穂

数は多かった。また、登熟期間の日照時間が多かったため子実重は平年比116%であった。リットル重は平年をやや上回り、千粒重は平年をやや下回った。検査等級は1等であった。以上のことから、本年の作況は「良」である。

コムギ縞萎縮病が発生し、全ての反復で萎縮症状が認められた。出穂期は平年より2日遅い6月9日であった。登熟期間の6月中旬以降、気温は高く、降水量が少なく推移したため、登熟は極めて早まり、成熟期は平年より5日早い7月19日であり、登熟期間は平年より7日短かった。稈長、穂長は平年並で、穂数は多かった。また、登熟期間の日照時間が多かったため子実重は平年比116%であった。リットル重は平年をやや上回り、千粒重は平年をやや下回った。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (令和2年月.日)	9.16	9.16	0
出芽期 (令和2年月.日)	9.22	9.24	△2
出穂期 (令和3年月.日)	6.9	6.7	2
成熟期 (令和3年月.日)	7.19	7.24	△5
草丈(cm) (令和2年11月20日)	22.9	18.8	4.1
草丈(cm) (令和3年5月20日)	38.7	39.3	△0.6
草丈(cm) (令和3年6月20日)	91.3	90.4	0.9
茎数(本/m ²) (令和2年11月20日)	1758	1245	513
茎数(本/m ²) (令和3年5月20日)	1540	1461	79
茎数(本/m ²) (令和3年6月20日)	925	728	197
稈長(cm) (成熟期)	82	80	2
穂長(cm) (成熟期)	8.5	8.5	0.0
穂数(本/m ²) (成熟期)	825	690	135
子実重(kg/10a)	849	731	118
同上平年比 (%)	116	100	16
リットル重 (g)	809	803	6
千粒重 (g)	39.0	40.3	△1.3
品質 (検査等級)	1	1	-

注) 平年値は前7か年中、平成27年(最豊)、30年(最凶)を除く5か年の平均値。

2) 秋まき小麦（令和3年9月播種）

作 況：やや良

事 由：播種期は平年より7日早い9月16日であった。出芽期は平年より7日早い9月23日であった。播種が早く、出芽期以降の平均気温が平年並から高く経過したため、越冬前

の草丈、茎数は平年を上回った。

以上のことから、目下の作況は「やや良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (令和3年月.日)	9.16	9.23	△7
出芽期 (令和3年月.日)	9.23	9.30	△7
草丈(cm) (令和3年11月20日)	19.6	14.2	5.4
茎数(本/㎡) (令和3年11月20日)	1316	960	356

注) 平年値は前7か年中、平成27年(最豊)、令和2年(最凶)を除く5か年の平均値。

3) 春まき小麦

作 況：良

事 由：調査圃場は融雪材散布により3月16日に融雪期となった。3月下旬から4月上旬の気温は高く、降水量は少なかったため、圃場の乾燥が進み、播種期は平年より3日早い4月12日であった。播種後の4月下旬の気温は低く推移し、出芽期は平年並から1日早かった。出穂期は平年より4～5日遅かった。稈長、穂長は平年よりやや長く、穂数は平年より少なかった。7月19日の降雨によって「春

よ恋」で倒伏が発生した。7月中旬以降に高温で推移したため、成熟期は平年より6日早く、登熟期間は平年より短かった。一方、登熟期間の日照が多く、登熟条件が良好であったため、子実重は平年比108～127%で多収となった。リットル重は平年並から上回り、千粒重は平年を上回った。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目	春よ恋			はるきらり			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	4.12	4.15	△ 3	4.12	4.15	△ 3	
出芽期 (月.日)	4.29	4.29	0	4.29	4.30	△ 1	
出穂期 (月.日)	6.24	6.20	4	6.23	6.18	5	
成熟期 (月.日)	7.31	8.6	△ 6	8.3	8.9	△ 6	
草丈(cm)	(5月20日)	18.9	19.8	△ 0.9	20.3	20.6	0.3
	(6月20日)	81.8	71.7	10.1	79.6	70.6	8.7
茎数(本/m ²)	(5月20日)	460	582	△ 122	511	559	△ 48
	(6月20日)	703	799	△ 96	744	780	△ 36
稈長(cm) (7月20日)	100	96	4	99	92	7	
穂長(cm) (7月20日)	8.8	8.3	0.5	8.2	7.8	0.4	
穂数(本/m ²) (7月20日)	516	664	△ 148	554	666	△ 112	
子実重(kg/10a)	575	534	40	648	510	138	
同上平年比 (%)	108	100	8	127	100	27	
リットル重 (g)	793	795	△ 2	813	791	22	
千粒重 (g)	42.3	39.4	2.9	48.1	40.7	7.4	
品質 (検査等級)	1	1	-	1	1	-	

注) 平年値は前7か年中、27年(最豊)、平成29年(最凶)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし（サイレージ用）

作 況：やや不良

事 由：播種期は平年より3日遅い5月18日、出芽期は平年より4日遅い6月3日であった。6月下旬以降、平均気温は高く推移し、開花期は平年より4日、抽糸期は平年より3日早かった。6月中旬から7月下旬まで著しい干ばつ傾向となった影響により、8月20日時点の草丈は平年より47.5cm低い243.1cmであった。収穫期は平年より4日遅い9月28日であ

り、総体の乾物率は平年より4.4ポイント高かったものの、収穫時の熟度は黄熟初期と平年並であった。収穫時の稈長が平年より39cm低かったことから、乾物茎葉重は平年より112kg/10a少なく、乾物総重および推定TDN収量は平年比93%および94%とやや少なかった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	チベリウス			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.18	5.15	3	
出芽期 (月.日)	6.3	5.30	4	
開花期 (月.日)	7.27	7.31	△4	
抽糸期 (月.日)	7.28	7.31	△3	
収穫期 (月.日)	9.28	9.24	4	
収穫時の熟度	黄熟初期	黄熟初期		
草丈(cm)	(6月20日)	27.9	34.9	△7.0
	(7月20日)	175.4	176.6	△1.2
	(8月20日)	243.1	290.6	△47.5
稈長(cm)	(9月20日)	222	261	△39
葉数(枚)	(6月20日)	4.6	5.3	△0.7
	(7月20日)	13.0	12.9	0.1
	(8月20日)	14.6	14.8	△0.2
生総重(kg/10a)	5224	6447	△1223	
乾物茎葉重(kg/10a)	797	909	△112	
乾物雌穂重(kg/10a)	992	1016	△24	
乾物総重(kg/10a)	1790	1925	△135	
同上平年比(%)	93	100	△7	
推定TDN収量(kg/10a)	1307	1393	△86	
同上平年比(%)	94	100	△6	
総体の乾物率(%)	34.3	29.9	4.4	
乾雌穂重割合(%)	55.4	55.3	0.1	
有効雌穂割合(%)	100.0	99.1	0.9	

注1) 平年値は前7か年中、平成29年（最豊）、30年（最凶）を除く5か年の平均。

2) 推定TDN収量＝乾物茎葉重×0.582＋乾物雌穂重×0.850。

5) 大豆

作況：やや不良

事由：播種は平年並の5月21日に行い、低温寡照により出芽期は平年より4日遅い6月7日であった。6月下旬から高温傾向が続き、開花始は平年より6日早かったが、極端な少雨だったため生育はやや抑制傾向であった。8月初旬に集中的な降雨があった後、再び少雨傾向が続いた。以降の気温は8月上・中旬は低くその後は概ね平年並に経過した。成熟期は平年よ

り11日早く、成熟期における主茎長はやや短く、主茎節数は同等、分枝数は多く、着莢数はわずかに多かった。一莢内粒数は平年より多かったが、百粒重は平年より1割程度軽く、子実重は平年比95%とやや低収であった。屑粒率はやや低く、外観品質は優った。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目		ユキホマレ		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.21	5.21	0
出芽期	(月.日)	6.7	6.3	4
開花始	(月.日)	7.15	7.21	△ 6
成熟期	(月.日)	9.14	9.25	△11
主茎長(cm)	(6月20日)	9.1	11.1	△ 2.0
	(7月20日)	50.4	49.1	1.3
	(8月20日)	58	64.2	△ 6.2
	(9月20日)	61	64	△ 3.0
	(成熟期)	61.0	64.0	△ 3.0
本葉数(枚)	(6月20日)	1.3	0.8	0.5
	(7月20日)	8.1	7.3	0.8
主茎節数	(8月20日)	10.7	10.4	0.3
	(9月20日)	10.4	10.3	0.1
	(成熟期)	10.4	10.2	0.2
分枝数(本/株)	(7月20日)	5.3	4.3	1.0
	(8月20日)	5.7	5.6	0.1
	(9月20日)	5.7	4.8	0.9
	(成熟期)	5.7	4.9	0.8
着莢数(個/株)	(8月20日)	78.1	78.5	△ 0.4
	(9月20日)	73.2	71.7	1.5
	(成熟期)	73.2	71.1	2.0
一莢内粒数		2.09	1.92	0.17
子実重(kg/10a)		325	342	△ 17
同上平年比(%)		95	100	△ 5
百粒重(g)		28.8	31.6	△ 3
屑粒率(%)		1.2	1.7	△ 0.5
品質(検査等級)		1等	2上	

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

6) 小豆

作況：平年並

事由：播種は平年並の5月21日に行い、低温寡照により出芽期は平年より4～5日遅れ6月10～11日だった。6月下旬以降は高温傾向が続いたが、極端な少雨だったため生育は抑制傾向で、開花始は平年と比較して「きたろまん」では4日早い7月20日だったが、「エリモショウズ」では3日遅い7月26日だった。7月中下旬の著しい高温少雨により落花し着莢は遅れた。成熟期は「エリモショウズ」が平年より1日早い9月28日、「きたろまん」が平年より3日遅い9月29日だった。平年と比較して「エリ

モショウズ」は主茎長が短く、主茎節数と分枝数が多く、着莢数と一莢内粒数がやや少なかった。「きたろまん」は主茎長がやや短く、主茎節数が多く、分枝数が少なく、着莢数がやや多く、一莢内粒数が少なかった。子実重は、「エリモショウズ」が平年の94%、「きたろまん」が同107%と、品種によって傾向が異なった。百粒重はいずれも平年より重く、屑粒率は虫害により高く、等級はわずかに劣った。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目	エリモショウズ			きたろまん			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.21	5.21	0	5.21	5.21	0	
出芽期 (月.日)	6.10	6.6	4	6.11	6.6	5	
開花始 (月.日)	7.26	7.24	2	7.20	7.24	△ 4	
成熟期 (月.日)	9.28	9.29	△ 1	9.29	9.26	3	
主茎長 (cm)	(6月20日)	4.2	4.3	△ 0.1	3.4	4.1	△ 0.7
	(7月20日)	18	19.9	△ 1.9	15.7	18.7	△ 3.0
	(8月20日)	61.7	70.4	△ 8.7	64.3	66.5	△ 2.2
	(成熟期)	64.8	74.3	△ 9.5	68.6	70.5	△ 1.9
本葉数 (枚)	(6月20日)	63.6	74.9	△ 11.3	66.4	69.4	△ 3.0
	(7月20日)	0.3	0.6	△ 0.3	0.3	0.6	△ 0.3
主茎節数	(8月20日)	15.6	14.0	1.6	15.0	13.0	2.0
	(9月20日)	15.9	14.0	1.9	14.9	12.9	2.0
	(成熟期)	16.1	13.8	2.3	15.4	13.0	2.4
分枝数 (本/株)	(7月20日)	2.6	2.3	0.3	2.1	1.8	0.3
	(8月20日)	5.1	4.0	1.1	3.4	3.4	0.0
	(9月20日)	4.6	4.2	0.4	3.3	3.4	△ 0.1
	(成熟期)	4.7	4.3	0.4	3.2	3.4	△ 0.2
着莢数	(8月20日)	43.6	40.1	3.5	43.9	37.2	6.7
	(9月20日)	49.4	50.0	△ 0.6	48.2	47.4	0.8
	(成熟期)	49.2	51.5	△ 2.3	50.7	48.5	2.2
一莢内粒数	6.27	6.43	△ 0.16	5.77	6.45	△ 0.68	
子実重(kg/10a)	353	375	△ 22	390	365	25	
同上平年比 (%)	94	100	△ 6	107	100	7	
百粒重 (g)	16.5	15.0	1.5	19.0	16.1	2.9	
屑粒率 (%)	15.8	0.6	15.2	19.8	5.6	14.2	
品質 (検査等級)	4上	3下		4上	3下		

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最凶)、令和元年(最豊)を除く5か年の平均。

2) 子実重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

7) 菜 豆

作 況：不良

事 由：播種は平年並の5月21日に行った。低温寡照により出芽期は平年より5日遅い6月7日であった。6月下旬から高温傾向が続き、開花始は平年より4日早い7月6日であった。その後7月下旬まで続いた著しい高温少雨傾向により登熟は急激に進み、成熟期は平年より17日早い8月17日であった。草丈、主茎節数、分枝数はいずれも平年を下回った。

着莢数は多く、一莢内粒数もやや多かったが、百粒重は平年の7割以下と極端な小粒で、子実重は平年比74%と極めて低収であった。小粒により屑粒率は平年を大きく上回り、等級はわずかに劣った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	大正金時			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.21	5.21	0	
出芽期 (月.日)	6.7	6.2	5	
開花始 (月.日)	7.6	7.10	△ 4	
成熟期 (月.日)	8.17	9.3	△ 17	
草丈 (cm)	(6月20日)	8.7	11.0	△ 2.3
	(7月20日)	35.5	36.2	△ 0.7
	(8月20日)	34.9	40.6	△ 5.7
	(成熟期)	34.9	40.8	△ 5.9
本葉数(枚)	(6月20日)	1.1	0.8	0.3
	(7月20日)	3.1	4.0	△ 0.9
主茎節数	(8月20日)	5.0	5.5	△ 0.5
	(成熟期)	5.0	5.5	△ 0.5
分枝数(本/株)	(7月20日)	3.7	5.6	△ 1.9
	(8月20日)	4.0	5.3	△ 1.3
	(成熟期)	4.0	5.4	△ 1.4
着莢数(個/株)	(8月20日)	23.2	20.7	2.5
	(成熟期)	23.2	20.7	2.5
一莢内粒数	2.90	2.79	0.11	
子実重(kg/10a)	225	306	△ 81	
同上平年比 (%)	74	100	△ 26	
百粒重 (g)	45.1	65.9	△ 20.8	
屑粒率 (%)	41.9	13.9	28.0	
品質 (検査等級)	4 上	3 下		

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

3) 屑粒は、農産物検査規格における被害粒および未熟粒に準じる。

4) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

8) ばれいしょ

作 況：良

事 由：植え付けは平年より2日遅い5月12日に行った。植え付けの遅れに加え、5月下旬の平均気温が低かったため、萌芽期は平年より4日遅かった。両品種ともに開花始は平年並で、茎数も平年並であったが、6～8月の気温が高かったことと、7月の降水量が少なかったことから、茎長は平年より低かった。しかし、上いも数は平年より多く、8月上旬に十分な量の降水があったことから、塊茎の肥大が急激に進んだ。「男爵薯」では、黄変が始まった頃から茎

葉の再生が見られ、枯ちよう期は平年より23日遅い9月24日であった。上いも数、上いも平均重が平年を大きく上回ったため、上いも重は平年比134%であった。「コナユタカ」の枯ちよう期は降霜の影響によって平年より7日遅い10月20日であった。上いも平均重は平年よりも小さかったものの、上いも数が平年よりも多く、でん粉価は1.1%高かったことから、でん粉重は平年比110%と多かった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		男爵薯			コナユタカ		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期	(月.日)	5.12	5.10	2	5.12	5.10	2
萌芽期	(月.日)	6.3	5.30	4	6.6	6.2	4
開花始	(月.日)	6.29	6.29	0	7.3	7.4	△ 1
枯ちよう期	(月.日)	9.24	9.1	23	10.20	10.13	7
茎長(cm)	(6月20日)	16.7	23.5	△ 6.8	9.6	13.3	△ 3.7
	(7月20日)	44	55	△ 12	62	75	△ 13
	(8月20日)	44	55	△ 11	74	97	△ 23
茎数(本/株)	(6月20日)	4.4	3.9	0.5	2.2	2.7	△ 0.5
	(7月20日)	4.9	4.4	0.5	2.7	2.9	△ 0.2
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	5409	4649	760	3906	3835	71
	(9月20日)	6186	4611	1575	5315	5716	△ 401
でん粉価(%)	(8月20日)	15.7	15.1	0.6	18.7	19.1	△ 0.4
	(9月20日)	16.6	15.0	1.6	19.4	21.0	△ 1.6
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	-	-	-	981	1129	△ 148
上いも数(個/株)		12.2	10.3	1.9	10.4	8.9	1.5
上いも平均重(g)		114	103	11	145	168	△ 23
上いも重(kg/10a)		6186	4611	1575	6738	6475	263
同上平年比(%)		134	100	34	104	100	4
でん粉価(%)		16.6	15.0	1.6	22.6	21.5	1.1
でん粉重(kg/10a)		-	-	-	1456	1323	133
同上平年比(%)		-	-	-	110	100	10

注) 平年値は前7か年中、平成30年(最凶)、令和元年(最豊)を除く5か年の平均。

9) てんさい

作 況：良

事 由：移植栽培の播種は、平年より1日遅い3月24日に行った。以降、4月中旬まで気温が高めに経過したため、育苗期間中の苗の生育は非常に良好であった。移植は、平年より2日遅い5月6日に行った。移植前の降雨で土壌が湿潤であったため、活着は順調であった。直播栽培の播種期は、平年より2日遅い5月7日であったが、その後十分な降雨があり気温も高めであったため出芽がやや早まり、出芽期は平年より1日遅い5月18日であった。

以降、6月中旬までは、最高気温が平年より高く、降水量が十分であったため、生育が平年より進んだ。

その後、6月下旬から8月上旬までの高温乾燥により、地上部の生育がかなり抑制された。

表 その1

調査項目	移植						直播			
	リッカ			アマホマレ			リッカ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3.24	3.23	1	3.24	3.23	1	5.7	5.5	2	
移植期 (月.日)	5.6	5.4	2	5.6	5.4	2	-	-	-	
出芽期 (月.日)	-	-	-	-	-	-	5.18	5.17	1	
収穫期 (月.日)	10.19	10.19	0	10.19	10.19	0	10.19	10.20	△ 1	
草丈 (cm)	(5月20日)	7.2	7.4	△ 0.2	7.4	7.0	0.4	-	-	-
	(6月20日)	27.9	25.4	2.5	29.6	25.8	3.8	18.0	13.2	4.8
	(7月20日)	47.3	53.0	△ 5.7	46.9	52.9	△ 6.0	48.5	48.1	0.4
	(8月20日)	48.9	59.3	△ 10.4	46.7	59.0	△ 12.3	53.5	63.4	△ 9.9
	(9月20日)	46.8	61.3	△ 14.5	48.5	61.4	△ 12.9	56.6	64.7	△ 8.1
生葉数 (枚)	(5月20日)	6.6	5.6	1.0	4.9	5.0	△ 0.1	-	-	-
	(6月20日)	11.8	11.7	0.1	13.0	11.6	1.4	8.7	8.0	0.7
	(7月20日)	18.1	18.6	△ 0.5	21.0	20.2	0.8	16.1	15.6	0.5
	(8月20日)	19.0	23.2	△ 4.2	22.9	25.9	△ 3.0	20.8	21.7	△ 0.9
	(9月20日)	23.5	25.2	△ 1.7	28.2	28.8	△ 0.6	22.9	23.7	△ 0.8
茎葉重 (g/個体)	(6月20日)	126	82	44	156	81	75	33	12	21
	(7月20日)	483	503	△ 20	551	551	0	445	338	107
	(8月20日)	460	749	△ 289	498	824	△ 326	544	750	△ 206
	(9月20日)	446	707	△ 261	555	840	△ 285	603	741	△ 138
根重 (g/個体)	(6月20日)	25	16	9	39	19	20	2	0.8	1
	(7月20日)	365	253	112	426	265	161	212	113	99
	(8月20日)	831	745	86	777	735	42	684	552	132
	(9月20日)	1163	1069	94	1121	1028	93	1050	877	173

注 1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

一方、根部は平年を上回る肥大が続いた。

8月10日の多雨以降は、高温乾燥状況が解消され、根部は、収穫期まで平年を上回る肥大が続いた。

根中糖分は、9月上中旬の最低気温が平年を下回り、降水量も少なかったため、順調に上昇したが、9月下旬以降最低気温が平年を上回り降水量も多くなったため、その後の上昇は抑制された。

収穫は、ほぼ平年並の10月19日に行った。収穫期の根重は、移植栽培、直播栽培ともに平年より多かった(平年比120~134%)。根中糖分は平年よりやや低く(平年比94~97%)、糖量は平年より多かった(平年比115~125%)。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

表 その2

調査項目		移植						直播		
		リッカ			アマホマレ			リッカ		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
根周 (cm)	(7月20日)	24.3	21.7	2.6	26.1	23.0	3.1	20.5	16.1	4.4
	(8月20日)	32.9	32.1	0.8	34.2	32.7	1.5	30.0	27.8	2.2
	(9月20日)	36.7	36.0	0.7	37.9	37.5	0.4	34.5	32.9	1.6
根中糖分 (%)	(9月20日)	17.26	16.50	0.76	18.83	16.90	1.93	17.18	16.20	0.98
茎葉重 (kg/10a)	(収穫期)	3750	4399	△ 649	4600	5494	△ 894	4560	4823	△ 263
根重 (kg/10a)	(収穫期)	9480	7747	1733	8400	6982	1418	8530	6378	2152
同上平年比(%)		122	100	22	120	100	20	134	100	34
根中糖分(%)		17.22	18.28	△1.06	18.50	19.09	△0.59	17.04	18.22	△1.18
同上平年比(%)		94	100	△ 6	97	100	△ 3	94	100	△ 6
糖量(kg/10a)		1628	1415	213	1553	1331	222	1453	1160	293
同上平年比(%)		115	100	15	117	100	17	125	100	25

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

10) 牧草(チモシー)

作況: 不良

事由: 萌芽期は平年より13日早い4月9日であり、冬損は認められなかった。

1番草; 5月下旬が平年より低温、寡照で経過したが、6月以降は高温多照で経過したため、出穂始は平年と同日で出穂期は平年より1日早かった。収穫は平年より2日早い6月16日に行った。刈取時の草丈および出穂程度は平年並であり、乾物収量は平年比97%と平年並であった。

2番草; 収穫は平年より3日早い8月4日に行った。前番草収穫後は平年に比べて著しい高温少雨が続いたことから再生が進まず、

収穫時の草丈は平年より27cm短く、節間伸長程度も平年より低かった。そのため2番草の乾物収量は平年比43%と非常に少なかった。

3番草; 収穫は平年より3日遅い10月6日に行った。2番草刈取後は気温の高い旬が多く、日照時間も8月中旬以降平年並から多く推移した。3番草の乾物収量は平年比131%と多かった。

結果、1~3番草の合計乾物収量は平年比89%と平年を11%下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目		なつちから		
		本年	平年	比較
萌芽期	(月.日)	4.09	4.22	△13
冬損程度		1.0	1.2	△0.2
被度(%)	(5月20日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始	(月.日)	6.11	6.11	0
出穂期	(月.日)	6.14	6.15	△1
出穂程度	1番草	8.0	8.0	0.0
節間伸長程度	2番草	2.9	4.0	△1.1
刈取日(月.日)	1番草	6.16	6.18	△2
	2番草	8.04	8.07	△2
	3番草	10.06	10.03	3
倒伏程度	1番草	1.5	1.0	0.5
病害罹病程度	1番草	1.0	1.0	0.0
	2番草	1.5	2.1	△0.6
	3番草	3.5	3.1	0.4
草丈(cm)	(5月20日)	47	38	9
	(6月5日)	83	73	10
	1番草	106	98	8
	2番草再生時	29	39	△10
	2番草	40	67	△27
	3番草再生時	40	37	3
生草収量(kg/10a)	3番草	42	39	3
	1番草	2,537	2,471	66
	2番草	251	922	△671
	3番草	576	439	137
	合計	3,364	3,833	△469
乾物率(%)	1番草	21.8	23.1	△1.3
	2番草	36.3	23.8	12.5
	3番草	29.0	29.0	0
乾物収量(kg/10a)	1番草	552	569	△17
	同上平年比(%)	97	100	△3
	2番草	91	213	△122
	同上平年比(%)	43	100	△57
	3番草	167	127	40
	同上平年比(%)	131	100	31
	合計	810	909	△99
	同上平年比(%)	89	100	△11

注1) 平年値は前7か年中、平成28年(最豊)、令和元年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 冬損程度は1:無または微~9:甚。出穂程度および節間伸長程度は、1:無~9:極多。倒伏程度および病害罹病程度は、1:無または微~9:甚。病害は主に斑点病。

付表1 各作物の耕種概要

作物名	一区面積 (m ²)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/m ²)	播種量 (kg/10a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	7.2	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	255	-	-
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	340	-	-
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	-	-	7,491
4. 大豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
5. 小豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
6. 菜豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	-	-	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生えん麦	60.0	23.8	1	-	-	7,003
9. 牧草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	-	-	2.0	-

付表2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量 (kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	6.0	18.8	7.5	3.8	-	起生期追肥 N: 3.0	H27年より変更
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0	-		
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0	3,000	炭カル:150	
4. 大豆	1.8	15.0	7.8	3.0	-		
5. 小豆	4.0	20.0	11.2	4.0	-		
6. 菜豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0			
8. てんさい	15.0	30.0	12.3	6.8			
9. 牧草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	3.0		〔 造成時 炭カル:200 ダブリン:30 〕	

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

1) 麦類に関する試験

麦類畑作グループ（麦類）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「優良品種決定調査」では秋まき小麦の「北見98号」、「北見99号」春まき小麦では「北見春83号」を供試し、「北見98号」は試験休止とした。秋まき小麦「北見100号」、「北見101号」、春まき小麦「北見春85号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW8号」等について適応性を検討した。

二条大麦では、「二条大麦の品種選定試験」により適応性検定試験を行い、「札育8号」を試験継続とし、「札育10号」を新配布系統とした。

2) 畑作物に関する試験

麦類畑作グループ（畑作）は豆類やてん菜などの畑作物の新品種育成や品種選定、栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、大豆系統適応性検定試験を、「畑作物の地域適応性検定試験（大豆系適相当）」として場内圃場で十系統7系統の適応性の検定を行った。「畑作物の地域適応性検定試験（優決基本相当）」で小豆の十育系統3系統、菜豆の十育系統2系統の検定を行った。公募型研究では、「菜豆の多収・耐病性に優れた品種開発促進」を十勝農試豆類畑作グループと共同で実施した。

てん菜では、「てん菜輸入品種検定試験」として、民間育成の9系統を検定した。そのうち「H154」が北海道優良品種に認定された。その他、継続検討が5系統、廃棄が3系統である。また、普及見込地域における除草剤試験を実施した「KWS 8K879」も北海道優良品種に

認定された。

てん菜の育成系統では、「テンサイ育成系統特性評価」として、北農研育成の1系統において、オホーツク地域における系統適応性検定、そう根病抵抗性検定を行った。

直播栽培試験では、「北海道の製糖産業を支えるテンサイ直播適性の解明と選抜実証 1-1) 直播栽培における適性要因の解明」において、8品種を直播栽培と移植栽培に供試し、初期生育調査、収穫調査等を行った。また同様の試験を行っている十勝農試、北海道糖業、日本甜菜製糖とデータを比較した。その結果、直播栽培で相対的に収量が高くなる品種と低くなる品種が明らかとなり、直播栽培適性の存在が明らかになった。

3) ばれいしょに関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成並びに栽培試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は「馬鈴しょ品種開発事業Ⅱ」により、安定多収な品種の育成を進めている。また、「ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性バレイショ品種開発に資する有望系統の特性評価」ではジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性を有するでん粉原料用品種の育成、ホクレンとの共同研究課題「トヨシロ」置き換えの加工用馬鈴しょ品種開発強化」では熟期の早い加工用品種育成の強化に取り組んでいる。

選抜効率の向上については、「でん粉原料用馬鈴しょにおける早掘り適性をもつ多収品種の開発強化」で中期世代の9月上旬収穫による早期肥大性の評価、有望系統の栽培特性および主産地適応性を評価し、普及性の高い有望系統開発を強化している。「馬鈴しょGr・PVY等の抵抗性品種開発強化および特性検定試験」では育成3年目の系統について、ジャガイモシロシストセンチュウ、ジャガイモYウイルス、ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性遺伝子および海外において枯ちよう期との関連が報告されている遺伝子を対象にしたDNAマーカーによる選抜を実施している。

品質の向上については「でん粉原料用馬鈴しょにおける高品質でん粉系統の開発促進」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の選抜強化」により、でん粉品質並びにチップ加工適性の優れる品種の開発促進を行っている。

耐病性の向上については「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発促進」の各試験研究課題により、前出の課題と合わせて耐病虫性（ジャガイモシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病）に優れる品種の開発促進を進めているとともに、特性検定試験を実施している。

「優良品種決定調査」では、加工用3系統について検討し、「北育30号」を試験中止、「北育29・31号」を継続検討とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成3系統について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行い、「CP13・14」を試験中止、「CP15」を継続検討とした。

また、職員研究奨励事業として、「ゲノム解析を用いたスマート育種法構築のための基盤整備」に取り組んだ。

4) 牧草・飼料作物に関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（牧草）では、チモシー新品種育成試験、牧草・飼料作物の系統評価、品種比較試験、栽培試験などの資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業Ⅱ」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。また、北海道農業研究センターが育成したアカクロバ2系統、サイレー用とうもろこし2系統のオホーツク地域での適応性検定試験を実施した。ホクレンとの共同研究「飼料品質の向上に寄与するチモシー新品種の開発促進」では、新たな育種素材の導入と特性評価、及び広域適応性早生2系統の生産力予備検定試験を実施したほか、早生育成2系統の生産力検定試験を実施した。（一社）日本草地畜産種子協会との共同研究「広域適応性チモシー品種の開発促進」では、広域適応性早生2系統の生産力予備検定試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試

験」および「飼料作物品種比較試験（ペレニアライグラス品種・系統の特性検定調査）」では、牧草3草種とサイレー用とうもろこしの品種比較試験を実施した。民間受託試験「UPOVに準拠したチモシー品種登録審査基準策定のための基礎調査」では、UPOVテストガイドラインの改定に伴う国内の品種登録審査基準改定のための標準品種候補の審査形質データを収集した。

また、職員研究奨励事業として、「初期生育性に優れる新たなチモシー品種開発に向けた挑戦」、「アレロパシーに着目した雑草抑制力と抵抗力に優れるチモシー遺伝資源の探索」、および「チモシーの耐暑性強化を目指した検定法の確立およびゲノム解析」の3課題に取り組んだ。

5) 栽培環境に関する試験

生産技術グループ（栽培環境）は、土壌肥料（資材試験を含む）および環境保全に関する研究を実施している。

本年度は、終了課題「移植たまねぎに対する肥効調節型肥料を用いた分施省略技術の確立」（（株）ジェイカムアグリと共同）を「移植たまねぎに対する肥効調節型肥料を用いた分施省略技術」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第2期）3）(1)植物成長調整剤を用いた春まき小麦『春よ恋』の高品質安定多収栽培技術の開発」（中央農試、上川農試と共同）を「植物成長調整剤を用いた春まき小麦「春よ恋」の高品質多収栽培技術」として取りまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）に提出し、いずれも令和4年指導参考事項に採択された。「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第2期）2）(5)栄養生理的手法と遺伝資源を活用した収量性の選抜強化」（麦畑Gと共同）は成績会議に提出せず、次年度も課題内で継続実施する。

継続課題として、「リモートセンシングと圃場情報を活用した干湿害多発農地の診断手法の開発」（中央農試、十勝農試と共同）、「窒素施肥適正化のためのリアルタイム土壌診断技術の開発」（中央農試と共同）、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共

同)、「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共同)、「農作物病害虫診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壌調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試、花野センターと共同)を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「早期出荷向けたまねぎ(SN-3)における品質向上技術の開発」、「革新的技術導入による地域支援—オホーツク地域における秋まき小麦「きたほなみ」の気象変動に対応した窒素施肥管理技術の現地実証—」である。

単年度試験として「秋まき小麦「きたほなみ」の安定生産重視栽培技術およびモバイル端末を活用した生育診断法の開発」(中央農試、十勝農試と共同)、「生産現場に蓄積したビッグデータの活用による生産性向上手法の検討」(中央農試、十勝農試と共同)を実施した。

6) 病害虫に関する試験

生産技術グループ(病虫)は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策試験、馬鈴しょのそうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウの抵抗性評価、農作物病害虫診断試験、新農業資材実用化試験(新農薬効果査定試験)および病害虫発生予察事業を実施している。

本年度は、終了課題「オホーツク地方におけるでん粉原料用馬鈴しょの早期枯凋症状の原因解明と被害軽減対策の検討」を「でん粉原料用ばれいしょにおける早期枯凋症状の要因と半身萎凋病に対する品種間差」として取りまとめ、北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、令和4年指導参考事項に採択された。「侵入シストセンチュウ類緊急防除後の営農再開・再発防止支援技術の開発 3. Gpの再発生を防ぐ総合対策技術の開発(2)捕獲作物・抵抗性品種等の高度利用によるGp密度低減技術の開発」(北農研と共同)、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発促進」(馬鈴しょ牧草Gと共同)は成績会議に提出せず、次年度から始まる後継課題で継続実施する。

継続課題として、「病害虫発生予察調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花

野菜セと共同)、「農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野菜セと共同)、「馬鈴しょGr・PVY等の抵抗性品種開発強化および特性検定試験」(馬鈴しょ牧草G、中央農試と共同)、「インファロー散布を活用した馬鈴しょ害虫の防除法の確立」(十勝農試と共同)を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」(馬鈴しょ牧草Gと共同)、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、馬鈴しょ牧草G、中央農試、上川農試、十勝農試、北農研と共同)、「赤さび病の適正防除による秋まき小麦「きたほなみ」の多収技術の確立」(中央農試と共同)、「農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野菜セと共同)において「だいこんのヒメダイコンバエの防除対策」(北見農試)である。

単年度試験として「データを活用した病害虫防除予測技術の開発」を実施した。

7) 地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議3回、五者会議ならびに地域関係者会議(新型コロナ蔓延防止のため書面会議)を開催し、地域ニーズの現地聞き取り4ヶ所調査・ニーズ元への回答等を行った。

プロジェクト課題の該当は無かった。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については、研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

2 技術普及室の活動

1) 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

耕種(水稻・畑作・園芸)については、①水稻部会研修にかかる支援、②水稻栽培指導にかかるOJT支援、③糯米「きたゆきもち」

の安定生産（胴割れ米対策の検討）支援、④畑作部会研修にかかる支援、⑤大豆の倒伏による品質低下への対策樹立に向けた支援、⑥菜豆（赤系金時）皮切れ症状（裂皮粒）の原因究明と対策の検討について支援した。

植物保護については、①でん粉原料用ばれいしょGr抵抗性品種の早期枯凋要因の解析と栽培法の確立、②糖蜜吸着資材による新たな土壤還元消毒法の効果確認（トマト）、③ニンジン黄化病に対する効果的防除方法の確立、④湧別町チューリップにおける病害発生実態の把握、⑤ヒメダイコンバエの効果的な防除方法に関する支援（2か所）、⑥だいこんバーティシウム黒点病防除対策に関する情報提供を行った。

経営については、法人設立・運営に向けた取り組みへの支援を行った。また、スマート農業については、ICTに係るほ場調査手法やデータ解析手法の習得を支援した。

地域課題解決研修としては、普及活動によるスマート農業技術導入のあり方検討について支援を行った。

畜産については、①畜産部会研修にかかる支援、②規模拡大志向の酪農経営における経営シミュレーションの作成、③乳牛の飼料設計診断手法の習得について支援した。なお、②、③は他担当普及室へ支援を要請した。

高付加価値については、起業化セミナーのカリキュラム立案について、他担当普及室へ支援を要請して対応した。

人材育成については、新任職員に対する研修支援を行った。

病害虫や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたった。

2) 調査研究の実施

調査研究は3課題である。

1つ目は、「澱粉原料用馬鈴しょGr抵抗性品種の早期枯凋要因の解析と栽培法の確立である。

オホーツク管内では、以前より澱粉原料用ばれいしょが早期に黄化し枯れ上がる現象が確認されてきた。これまで、清里支所、網走支所、美幌支所で原因究明に取り組んでおり、

土壌病害や物理性など、それぞれ異なる原因として整理されたが、年次による発生程度の差、発生を助長する要因や対策等、不明な点が多かった。

北見農業試験場では、令和元年から3年まで研究課題として取り組んでおり、調査に同行し現地での発生状況等を確認し（8～9月）、1月に普及センター清里支所、JAと情報交換を実施した。

研究成果の要約は次の通り。

- ・3カ年63ほ場の調査で、20ほ場で8月下旬～9月初旬に60%以上の枯凋率となり、それらの圃場では半身萎凋病の発生程度が高かった。

- ・半身萎凋病の発生程度や枯凋率には品種間差があった。

- ・ほとんどの保場から微小菌核が検出され、1994～1995年の調査時より検出割合が3倍以上に増加した（発生拡大）。

- ・半身萎凋症状を呈する個体からは*Verticillium*属菌が検出され、その優占種は*V. daliae*であった。

- ・線虫類が半身萎凋病の発病を助長する場合があったが、助長の有無は年次間や品種間で異なった。

- ・その一方で、半身萎凋病の発病程度は品種間で明らかに異なったことから、半身萎凋病発生に与える影響は線虫類よりも品種の方が大きいと考えられた。

- ・殺線虫剤処理はネグサレセンチュウに対する防除効果が認められた一方で、半身萎凋病軽減効果が低く、早期枯凋症状に対する有効な防除手段にはならないと判断した。

- ・以上のことから、半身萎凋病による早期枯凋症状を軽減するためには、豆類導入等の適正な輪作体系を構築し、微小菌核密度を低く維持するとともに、抵抗性の強い品種を作付けすることが有効であると考えられた。

以上の結果を基に、網走農業改良普及センター各支所で取り組んでいる輪作体系の適正化に対し、助言を行っていく。

2つ目は、「スマート農業技術導入・活用時における普及活動手法の検討」である。

網走農業改良普及センターと連携してオホーツク管内全437戸を対象とし、管内におけるスマート農業技術の導入や活用に関するアン

ケート調査を実施した(回収率76.4%)。集計結果は下記のとおり要約された。

・アンケート回答者の約8割がICT機器を導入していた。自動操舵システムは約8割で複数台導入されていた。可変施肥機器は近年導入が進んだが、その活用割合は低かった。何れも導入・活用により「作業精度の向上」・「疲労軽減」を実感する農業者が多かったものの、「収量向上」・「肥料費・資材費の削減」を実感する農業者は少なかった。

・スマート農業機器の導入・活用場面において、農業者が苦勞した点として①導入コストが高い、②導入時のイメージがつきにくい、③補正情報の受信が不安定、④操作や設定が難しいが挙げられた。

・スマート農業機器の導入・活用時の解決法として①メーカーに問い合わせる、②機器を使い込んで慣れる、③地域の農業者に相談が挙げられた。

・スマート農業機器に関する意見・要望として①導入費用の低コスト化、②サーバーの増強、③Q&Aや専門用語に関する用語集が欲しい、④農業者の悩みの共有化と可視化をして欲しいが挙げられた。

・スマート農業技術導入・活用時における普及センターの役割として、スマート農業機器の導入・活用時における農業者への情報提供、関係機関との連携による地域コーディネート、導入効果の実証・調査等が考えられた。

以上の結果に基づき、スマート農業技術を導入・活用する場面で求められる普及活動内容や手法について、網走農業改良普及センター課題解決研修メンバーに助言した。

また、普及センターと連携し、ICT機器導入前後において農業者が必要とする情報をパンフレットとしてまとめ、管内全農業者へ提供した。アンケート集計結果は冊子として取りまとめ、網走農業改良普及センターのホームページに掲載した。さらに、前述の農業者向けパンフレットには、集計結果を誰でも閲覧できるよう、QRコードを表示した。

研修活動全般を通じ、各メンバーの意見集約・調整の仕方等、リーダー育成について支援した。

3つ目は、「だいこんにおけるヒメダイコンバエの総合的防除対策の検討」である。

本年度から研究課題として、釧路農業改良普及センターと連携し、「だいこんのヒメダイコンバエの防除対策」を実施している。本年も令和2年度と同様に釧路及び根室農改と連携し、①発生活長調査、②早期すき込みの励行(耕種的対策)、③効果的な薬剤の探索を検討した。

①発生活長調査

黄色水盤による発生活長調査を、釧路および根室農改でそれぞれ実施した。釧路では5月3週から成虫の発生が見られ初発が早まっていることが確認された。また、釧路・根室ともに黄色水盤で確認できる成虫数は、年次を追うごとに少なくなっているが、ほ場での被害状況から正確な発生量を表すものではない。黄色水盤の利用については、初発および発生ピークの確認を行うためのツールと認識する必要がある。

②早期すき込みの励行(耕種的対策)

釧路農改では、全体の発生量を抑えることを目的として、秋季のプラウ耕および収穫後残渣の早期すき込みを励行した。収穫後できる限り早く耕起するという意識の高まりと秋のプラウ耕が全戸で行われ、ヒメダイコンバエの発生量を抑える取り組みが継続されている。

③効果的な薬剤の探索

効果的な茎葉処理剤および粒剤について、春まき作型および晩夏まき作型にて検討した。薬剤は、作物登録は有しているものを限定し確認した。過去に茎葉散布剤の効果を確認した結果では、どの薬剤も反復間差が大きいことや作型によって効果に違いが見られるなど、安定した効果が得られなかった。精度を確保した条件で行った本年の試験では、茎葉処理剤の効果は認められなかった。一方で粒剤は、効果が認められる剤が確認でき、利用方法も含め今後研究課題として検討される。

3) 地域農業支援会議活動

オホーツク地域農業支援会議の活動は、要望のあった10課題に対して、現地聞き取り調査を4カ所で行った。五者会議・ニーズ元への回答については、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からリモート開催となり、地域関係者会議は書面開催となった。

技術体系化チームの活動はなかった。

4) 農業試験場における普及指導員の研修実施

本年度の高度専門技術研修（畑作）及び（植物保護）を北見農試内で実施する予定だったが、新型コロナの感染拡大防止の観点から、中止となった。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 足利和紀. チモシー (*Phleum pratense* L.) におけるリードカナリーグラス (*Phalaris arundinacea* L.) に対する競合力に及ぼすアレロパシーの影響. 北海道草地畜産学会 報 10: 7-16 (2022).
- 品田博史. ゲノム情報の活用で育種のムダをなくそう. 育種学研究 24: 80 (2022).
- Shizen Ohnishi, Masashi Kasuya, Tatsuya Sonoda, Hironobu Jinno. Normalization method for canopy temperature as an indirect indicator of yield potential in wheat breeding programs. *Breeding Science* 71: 520-527 (2021).
- Shoya Komura, Hironobu Jinno, Tatsuya Sonoda, Yoko Oono, Hirokazu Handa, Shigeo Takumi, Kentaro Yoshida and Fuminori Kobayashi. Genome sequencing-based coverage analyses facilitate high-resolution detection of deletions linked to phenotypes of gamma-irradiated wheat mutants. *BMC Genomics* 23: 111 (2022).
- Ryo Nakagami, Sotaro Chiba, Naoto Yoshida, Yoshiteru Senoo, Minako Iketani-Saito, Satoru Iketani, Hideki Kondo, Tetsuo Tamada. Epidemic progress of beet necrotic yellow vein virus: evidence from an investigation in Japan spanning half a century. *Plant Pathology* 71: 715-728 (2021).
- Hideho Hara, Akeo Iwasaki. A gooseberry sawfly *Euura suguri* sp. nov. (Hymenoptera: Tenthredinidae) from Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology* 27: 53-57 (2021).

2) 口頭発表

- 足利奈奈・大西志全・神野裕信・石田悦基・渡邊亜紀. 「つるきち」配合食パンの官能特性と関与成分解析ー (1) パン用途としての利用の可能性と特徴ー. 日本食品科学工学会 (オンライン開催, 2021. 8. 26).
- 三宅将之・杉山薫・中村美香子・石田悦基・渡邊亜紀・大西志全・神野裕信. 「つるきち」配合食パンの官能特性と関与成分解析ー (2) パン加工適性と官能特性ー. 日本食品科学工学会 (オンライン開催, 2021. 8. 26).
- 杉山薫・中村美香子・石田悦基・渡邊亜紀・大西志全・神野裕信. 「つるきち」配合食パンの官能特性と関与成分解析ー (3) 味・香り関与成分の探索ー. 日本食品科学工学会 (オンライン開催, 2021. 8. 26).
- 足利奈奈・林和希・大西志全・石田悦基・木澤恵子・早川克志. 北海道のパン用コムギの吸水性に対する損傷澱粉とアラビノキシランの影響. 日本育種学会 (オンライン開催, 2021. 8. 26).
- 林和希・足利奈奈・来嶋正朋・森田耕一・大西志全・荒木和哉. 春まき小麦育種の穂発芽選抜におけるSelected Bulk法の導入と効果検証. 日本育種学会・日本作物学会 (オンライン開催, 2021. 4. 7).
- 佐藤優美・佐藤三佳子・神野裕信・相馬ちひろ・鈴木千賀・林和希・鈴木孝子・其田達也・木内均・大西志全・荒木和哉. 赤さび病抵抗性遺伝子Lr34を導入した「きたほなみ」戻し交配系統における耐病性と農業形質. 日本育種学会・日本作物学会 (オンライン開催, 2021. 4. 7).
- 大西志全・木内均・飯島俊匡・浦池隆文・佐藤優美・其田達也・荒木和哉. UAVとサーモグラフィーで測定した葉面温度によるコムギの収量性選抜の可能性. 日本育種学会 第141回講演会 (オンライン開催, 2021. 4. 7).
- 池谷聡・大波正寿・安達時雄・妹尾吉晃・平山賢太郎. ドローン空撮による被覆率調査に基づくテンサイ直播栽培要因の解析. てん菜研究会 (2021. 7. 19)
- 池谷聡・大波正寿・来嶋正朋・安達時雄・妹尾吉晃・平山賢太郎. 直播栽培適性-移植栽培との比較. 北海道談話会シンポジウム (2021. 12. 4)

- 足利和紀. チモシーにおける初期生育性の遺伝率と間接選抜指標. 日本草地学会岩手大会 (オンライン開催, 2022. 3. 25-3. 31).
- 酒井 治・奥村 理・五十嵐俊成. 北海道オホーツク地域における春まき小麦「春よ恋」の植物調節剤施用条件下での窒素施肥法. 日本土壌肥料学会北海道大会 (2021. 9. 13-16).
- 桑原 萌・酒井 治・五十嵐俊成・柳田 大介. タイムラプスカメラを用いたたまねぎの球肥大曲線の作成. 日本園芸学会春季大会 (2022. 3. 20-21).
- 田中一生・酒井治・上堀孝之. 2021年オホーツク地域におけるコムギ縮萎縮病多発生下の秋まき小麦品種「きたほなみ」栽培の追肥効果. 日本作物学会北海道談話会報 62:22-23 (2021. 12).
- 柳田大介. 北海道在来ニンニクの栽培特性評価. 北海道園芸研究談話会 (2021. 12. 5).
- 佐々木太陽・小野寺鶴将・丸山麻理弥. ナストビハムシの発育零点と有効積算温度の解明及び幼虫によるジャガイモ塊茎の食害時期の推定. 第75回北日本病害虫研究発表会 (2022. 2. 17-18).

3) 専門雑誌記事

- 大西志全. <特集 道総研における作物育種の現状と今後の展開方法>北見農試小麦育種の近年の成果と今後の展望. 北農 88 (3) :27-33 (2021).
- 池谷 聡. 北のスイートメモリーズ ビートが奏でる北海道史. The JR Hokkaido No.404 (2021).
- 池谷 聡. 令和3年度てん菜の生産実績とその要因について. 北海道農産協会 てん菜だより第6号 (2022).
- 鈴木 剛. 技術特集 コンビネーション作業のいま. ニューカントリー 3月号:16-18 (2022).
- 池谷美奈子. 2021年に向けてのてん菜病害防除について. てん菜だより 第4号 4-6 (2021).
- 桑原 萌. 早期出荷向けたまねぎの収穫前進技術. 農家の友 5月号 70-73 (2021).
- 桑原 萌. 早期出荷向けたまねぎの収穫前進技術. ニューカントリー 2月号:66-67 (2022).
- 藤田涼平. ピックアップ「馬鈴しょ」. ニューカントリー 4月号 52-54 (2021).
- 藤田涼平. 馬鈴しょ育種の現状と今後の展望. 北農 87巻第2号 11-17 (2022).
- 飯田憲司. 北見農試におけるチモシー育種のこれまでとこれから. 北農 89巻1号 18-24 (2022).
- 飯田憲司. サイレージ用トウモロコシ「SH14081」. デーリイマン 2022年2月号 68-69 (2022).
- 飯田憲司. サイレージ用トウモロコシ「KEB7421」. デーリイマン 2022年3月号 54-55 (2022).
- 品田博史. 多収が魅力で、病害虫に強い早生食用ばれいしょ 「ゆめいころ」. 北海道馬鈴しょ協議会だより 第24号 1-5 (2022).
- 品田博史. 生食用馬鈴しょ「北育28号」. ニューカントリー 805号 12-13 (2021).
- 品田博史. ばれいしょ新品種「北育28号」. 北農 778号 15-16 (2022).
- 品田博史. 太鼓判 おすすめ品種紹介「ジャガイモ」北育28号. グリーンレポート 令和3年12月号 19 (2021).
- 品田博史. ゆめいころ (生食用・業務加工用) 目が浅くて害虫に強い!男爵薯に置き換え可能な早生ばれいしょ. いも類振興情報 第150号 14-17 (2022).
- 足利和紀. 質・量・強さの3拍子がそろった中生の晩のチモシー新品種「センリョク」. 畜産技術 2022年2月号 11-12 (2022).
- 上堀孝之. 畑作総括 「農家の友」12月号 20-21 (2021).
- 上堀孝之. 2023作物展望 (畑作) ニューカントリー1月号 42-43 (2022).
- 上堀孝之. 令和3年産豆類の生育、豆類栽培の考え方、輪作の必要性和事例、土作り、排水対策、除草剤の使用と中耕除草 明日の豆作り 公益財団法人日本豆類協会 34-48, 96-101 (2022).
- 上堀孝之. 令和3年産「きたほなみ」収量・品質から見えた課題と対策 農産協会麦作栽培資料 (2022).
- 小山拓也. 農産技術だより 第7号「今後の小麦病害虫防除対策」 13-20 (2021).
- 小山拓也. 豆類の病害虫. 明日の豆作り 公益財団法人日本豆類協会 102-124 (2022).

4) 著編書、資料

- 大西志全. 北海道の小麦づくり II 小麦品種の特性と栽培上の留意点. 令和3年度「北海道の小麦づくり」 47-63(2021).
- 唐 星児. 北海道農業と土壌肥料2021ー持続可能な北海道農業を支える土壌肥料研究ー. 北農会 127-133(2021).
- 酒井 治. 北海道農業と土壌肥料2021ー持続可能な北海道農業を支える土壌肥料研究ー. 北農会 66-70(2021).
- 藤田涼平. 最新農業技術作物Vol. 14. ◆ジャガイモの早掘り栽培、在来種(産地の栽培)普通栽培. 農山漁村文化協会 117-145 (2022).
- 岩崎暁生. 北海道の最新農業気象 気候変動に対する営農技術最前線 第2章 近年の気候の変化や異常気象への対応 病虫害対策 害虫. ニューカントリー2021年秋期臨時増刊号. (株)北海道協同組合通信社 48-56(2021).

5) 新聞記事

- 池谷 聡. 糖分多く収量向上期待 新ビート優良品種認定. 北海道新聞 (2021.9.2).
- 池谷 聡. テンサイ新品種「KWS 8K860」. 農業共済新聞 (2022.1.19).
- 桑原 萌. 早期出荷向けたまねぎの収穫前進技術. 農業共済新聞 (2021.11.17).
- 品田博史. 目が浅くて病虫害に強い早生の生食用ばれいしょ「ゆめいころ」. 日本農業新聞 (2022.3.29).
- 上堀孝之. 「検証 道農業～ばれいしょ、てんさい」 日本農業新聞 (2021.12).

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- (1) てん菜新品種「H154」
- (2) てん菜新品種「KWS 8K879」
- (3) とうもろこし(サイレージ用)「ミリアーノ(HK1614)」

2) 普及推進事項

なし

3) 指導参考事項

- (1) 植物成長調整剤を用いた春まき小麦「春よ恋」の高品質多収栽培技術
- (2) でん粉原料用ばれいしょにおける早期枯凋症状の要因と半身萎凋病に対する品種間差
- (3) 移植たまねぎに対する肥効調節型肥料を用いた分施省略技術
- (4) 令和3年度の発生にかんがみ注意すべき病虫害

4) 研究参考事項

なし

3 品種登録・特許申請

なし

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	R 3. 4. 14	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 5. 12	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 6. 2	農試講堂	場員
新規課題場内検討会議	R 3. 6. 15	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 7. 8	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 8. 4	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 9. 1	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 10. 6	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 11. 11	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 3. 12. 9	農試講堂	場員
現地委託試験成績検討会	R 3. 11. 26～12. 14	書面開催	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体
成績会議場内検討会	R 3. 12. 10	訓子府町公民館 多目的ホール	場員
定例庁内会議	R 4. 1. 13	農試会議室	場員
設計会議場内検討会	R 4. 2. 3, 4	訓子府町公民館 多目的ホール	場員
定例庁内会議	R 4. 2. 2	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 3. 3	農試講堂	場員
現地委託試験設計検討会	R 4. 3. 14～25	書面開催	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局長：鈴木 剛（ほ場管理）、森 光治（施設等整備）

委員：大西志全、池谷 聡、伊藤幸雄、藤田涼平、飯田憲司、酒井 治、小倉玲奈、
田中一生、松島英明

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：令和3年4月23日

- 1) 令和3年度防風林整備について
- 2) 牧草遺伝資源の場内持ち込みについて
- 3) 土壌分析の実施について
- 4) その他

第2回：令和4年2月14日

- 1) 令和4年度備品要望順位決定について
- 2) 令和5年度施設整備要望順位決定について
- 3) 防風林整備要望について

4)4-11圃場の利用について

5)大型圃場（4輪作・秋まき小麦2枚）ローテーションの変更について

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：鈴木剛

委員：伊藤幸雄、木内均、池谷聡、品田博史、足利和紀、木場稔信、佐々木太陽

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和3年4月8日

- 1)業務委員会開催要領
- 2)麦類畑作G（管理）業務体制
- 3)室外契約職員体制
- 4)室外契約職員のけが等の災害対応
- 5)週間作業予定
- 6)月間作業予定
- 7)作付計画
- 8)今後の作業予定など

② 定例委員会：4月15日から10月21日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1)機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2)室外契約職員週間作業計画

③ 臨時委員会：令和3年12月21日

- 1)令和3年度室外契約職員雇用実績等
- 2)令和4年度室外契約職員雇用計画等
- 3)機械契約職員雇用計画について
- 4)室外契約職員、機械契約職員雇用までのスケジュールと分担（案）

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：平井剛

委員：杉本義則、田澤暁子、松永浩、小野寺鶴将（図書連絡委員兼務）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和3年4月21日

- 1)図書連絡委員の選任
- 2)令和3年度定期刊行物購入計画の確認
- 3)今年度業務内容の確認
- 4)その他（資料保管庫の利用，道総研OPACの運用開始）

② 第2回委員会：令和3年9月29日（電子メール）

- 1)令和4年度定期刊行物購入計画の策定

③ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：柳田大介

委員：松島英明、其田達也、足利和紀、桑原萌

(2) 活動内容

第1回委員会：令和3年5月12日

第2回委員会：令和3年8月3日

5) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：平井 剛

委員：松島英明、林 和希、平井 剛（兼任）、池谷美奈子

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和3年4月28日

- 1) 本年度の委員
- 2) 令和2年度報告
- 3) 令和3年度活動計画
- 4) 流しの水漏れへの対応
- 5) その他

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局長：荒木和哉

気象担当：荒木和哉

とりまとめ：林和希

委員：其田達也、林和希、飯田憲司、田澤暁子、和崎俊文、池谷聡、高島聡史

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和3年4月13日

- 1) 定期作況調査報告実施体制
- 2) 定期作況調査報告実施要領
- 3) 年間日程
- 4) 具体的作業日程と該当作物
- 5) 最終作況の判定基準

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局：松島英明、平井 剛

委員：足利奈奈、池谷 聡、横川愁斗、藤田涼平、高島聡史、唐 星児、池谷美奈子、田中一生、
小山拓也

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和3年4月26日

4/22付け農研本総第40号により農業研究本部における公開デーは中止とする旨の指示があったため、これまでの経過と開催する場合に想定された分担等を確認するにとどめた。

8) オホーツク農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：柳田大介

事務局：森光治、荒木和哉、鈴木剛、平井剛

実行委員：木内均、飯田憲司、池谷聡、田中一生、藤田賢司

(2) 活動内容

①実行委員会：令和4年1月20日

1)開催案内通知確認

2)開催方法の確認

②開催告知（HP掲載）：令和4年2月16日

③web動画(youtube)公開期間：令和4年2月25日-3月25日

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
飼料作物の育種に関する試験成績書	R4.3	72	30

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名称	開催日	場所	内容	参加者
			新型コロナウイルス対策のため 開催実績なし	

2) マスコミ、広報誌等による報道

タイトル	報道機関	掲載・放送日
道産初！！スイーツ適性小麦が実るまで	財界さっぽろ	R03.09
スイーツ王国北海道に初の菓子用小麦「北見95号」誕生！	雑誌 HO	R03.10
ついにお菓子も麦チェン	JP03北海道応援マガジン	R03.10

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 北見農試公開デー2021

新型コロナウイルス対策のため開催中止

5 見学受入れ

年月日	団体名	人数
		新型コロナウイルス対策のため受け入れ中止

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

研 修 項 目	団 体・人 数	研 修 期 間	対 応 グ ル ー プ
	該当なし		

2 講師派遣

研修会および講習会	主 催 者	開 催 日	演 題	派 遣 者
道産小麦新品種（北見95号）勉強会	北海道農政部食品政策課	R3. 9. 10	北海道で初めての菓子専用品種「北見95号」	大西志全
斜里農協川上麦作集団講習会	斜里農協	R3. 12. 1	北見農試小麦育種の最前線	大西志全
大豆に関する意見交換会	小清水町大豆採種組合	R3. 11. 17	大豆の収量をしっかり確保するには	田澤暁子
高品質てん菜作り講習会	北海道農産協会	R3. 2. 10 -3. 10	てんさい直播栽培の現状と基本技術	池谷 聡
特別講義『生物産業ビジネスと地域活性化』	東京農業大学生物産業学部	R3. 10. 26	たまねぎの育種を通じた機能性開発（web動画公開）	柳田大介
第4回「上川大雪酒造」酒米生産者交流会講演会	（株）上川大雪酒造	R4. 2. 9	北海道の酒米における胴割れ粒発生の要因解析と対策（web動画公開）	田中一生
良質小麦安定生産技術講習会	（一社）北海道農産協会	R4. 1. 17～ 4. 30	令和3年産秋まき小麦収量・品質から見た技術的な課題と対策（web動画公開）	上堀孝之
令和3年度高品質てん菜づくり講習会	（一社）北海道農産協会	R4. 2. 10～ 3. 22	てん菜直播栽培で注意する点（web動画公開）	上堀孝之
令和3年度農作物関連栽培技術等研修会	北海道農業共済組合連合会	R4. 2. 24	そばの栽培管理・病虫害防除等	上堀孝之

3 職員研修

氏 名	研 修 項 目	場 所	期 間
高島聡史	新任職員研修	道総研プラザ	R3. 4. 12～R4. 4. 14
岩崎暁生	令和3年度新任研究部長級研修 令和3年度ハラスメント研修	道総研本部	R3. 4. 19～21
新井田隆	刈払い機取扱作業安全衛生教育	（株）技術能力開発センター北見教習所	R3. 4. 22
柴田 匠	アーク溶接等の特別教育	（株）技術能力開発センター北見教習所	R3. 5. 13～R3. 5. 14
柳田大介	新任主幹級研修	オンライン開催	R3. 5. 26～R3. 5. 27
柳田大介	ハラスメント研修	オンライン開催	R3. 5. 28
飯田憲司	新任主査級研修	オンライン開催	R3. 7. 27～R3. 7. 28
桑原 萌	令和3年度新任主任級研修	オンライン開催	R3. 9. 1～R3. 9. 2
柳田大介	令和3年度新任主幹級研修	オンライン開催	R3. 9. 6～R3. 9. 7
柳田大介	令和3年度ハラスメント研修	オンライン開催	R3. 9. 8

氏名	研修項目	場所	期間
桑原 萌	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R3. 9. 11～R3. 9. 12
酒井治他3名	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R3. 9. 14～R3. 9. 16
酒井治他3名	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R3. 11. 24
柳田大介	令和3年度農業研究本部新任研究主幹研修	オンライン開催	R3. 10. 12
桑原 萌	令和3年度農林水産関係若手研究者研修	オンライン開催	R3. 10. 20
佐藤優美	作物・飼料作物育種関係採用1～2年目職員研修会	中央農業試験場	R4. 1. 11～13
和崎俊文		〃	〃
高島聡史		〃	〃
横川愁斗	特定化学物質及び四アルキル鉛等作業主任者技能講習	(株)技術能力開発センター北見教習所	R4. 1. 19～R4. 1. 20
岩崎暁生他4名	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R4. 2. 17～R4. 2. 18
横川愁斗	チェーンソー以外の振動工具取扱従事者に対する安全衛生教育	網走建設業協会	R4. 2. 25
横川愁斗	伐木等業務安全衛生特別教育	林業・木材製造業労働災害防止協会北海道支部北見分会	R4. 3. 2～R4. 3. 4
横川愁斗	フルハーネス型安全帯仕様作業特別教育	(一社)北見地域職業訓練センター運営協会	R3. 3. 1～R3. 3. 3
大西志全他1名	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R4. 3. 20～R3. 3. 21
岩崎暁生他2名	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R4. 3. 20～R4. 3. 22
桑原 萌	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R4. 3. 21～R4. 3. 22
池谷美奈子	専門研修Ⅱ	オンライン開催	R4. 3. 27～R4. 3. 29
添島 均	令和3年度普及指導員指導力養成研修(研究と普及の連携強化研修)	オンライン開催	R3. 9. 7～8

4 職場研修

研修会および講習会	講師	開催日
ハラスメントについて	総務課長 森光治	R3. 5. 26
交通安全について	総務課長 森光治	〃
一般事業主行動計画について	総務課長 森光治	〃
農作業の安全について	研究主幹 鈴木剛	〃
病害虫汚染防止について	場長 梶山努	〃
契約職員に対する作業指示について	研究部長 岩崎暁生	〃

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期間
該当無し			

Ⅶ その他

1 技術体系化チーム

技術体系化チームとしての取り組みはなかった。

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチームで取り組んだ課題はなかった。

オホーツク管内の各関係機関より令和3年度地域課題・農業試験研究課題ニーズとして10件の要望があった。要望の具体的内容把握のため、4カ所で現地聞き取り調査を実施した。

過年度ニーズ回答： 6/17 網走農業改良普及センター（JAきたみらい）

現地聞き取り調査： 9/ 9 滝上町役場

10/19 網走農業改良普及センター清里支所（JAしれとこ斜里、JA清里町、JA小清水、
網走農業改良普及センター清里支所、ホクレン中斜里製糖工場）

11/ 4 網走農業改良普及センター遠軽支所

11/ 4 美幌町農業協同組合

3 表彰・受賞

(1) 令和2年北農賞（第82回）（令和3年12月16日）

報文：「セル成型苗を用いた加工用トマトの栽培技術とその導入効果」

白井康裕・木村義彰・大橋優二・石井耕太・山田洋文・松本匡祐・小野島晴子・江原 清・鳥越昌隆・
黒島 学・柳田大介・福川英司

(2) 令和2年北農賞（第82回）（令和3年12月16日）

品種育成：ながいも「とがち太郎」

平井 剛・田縁勝洋・鳥越昌隆

4 行事

月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
4月 1日	辞令交付式(新規採用)	26日-	(書面開催)北見農試現地委託試験成績検
20日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会	12月 14日	討会
5月 10日	(Web開催)第1回農研本部場長会議	30日-	(Web開催)飼料作物品種比較試験成績検
5月 26日	職場研修(ほ場汚染防止・労働安全等)	12月 1日	討会
6月 1日	(Web開催)第1回研究部長会議	12月 8日	第7回本部長会議(対面)
10日	(Web開催)第2回農研本部場長会議	13日	(Web開催)第2回研究部長会議
16日	場内新規課題検討会議	10日	場内成績検討会議
18日	(Web開催)全国農業関係場所長会議	17日	(Web開催)北見工大社会連携推進センター産学官連携推進員・協力員合同会議
17日	場内見学案内リハーサル	16日	第82回北農賞表彰状等授与式
22日	(Web開催)第1回本部長・場長会議	22日	防火訓練
25日	訓子府町地域活性化チャレンジ事業審査会	27日	(書面開催)オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会
7月1-2日	(Web開催)新規課題検討会議(畜産部会)	1月 4日	仕事始め
5-8日	(Web開催)新規課題検討会議	12日	(書面開催)オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会
15日	(Web開催)第1回事故防止・安全対策会議	17-21日	(Web開催)北海道農業試験会議成績会議
21日	(Web開催)オホーツク地域農業気象連絡協議会	20日	(Web開催)第5回農研本部場長会議
29日	試験圃場適正使用状況確認調査	26日	(書面開催)オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会
29日	第6回訓子府まちづくり推進会議	26日	(Web開催)第8回本部長会議
30日	(Web開催)設計会議 秋まき小麦分科会	2月 2日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会(欠席)
8月 23日	(Web開催)科学技術振興に関する北見・網走地域懇談会	3-4日	場内設計検討会議
9月 14日	(Web開催)第4回本部長会議	16日	(書面開催)NATEC定期総会・(web配信)研究交流会(2.16-3.16)
27日	(Web開催)第3回農研本部場長会議	16日	(書面開催)オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会
29日	(Web開催)第2回事故防止・安全対策会議	17日	(Web開催)農業新技術発表会(全道版)
10月 6日	(Web開催)第2回本部長・場長会議	18日	(Web開催)第9回本部長会議
14日	内部監査	21日	(Web開催)設計会議 てん菜分科会
29日	作況報告会	25日	(web開催)オホーツク農業新技術セミナー(2.25-3.25)
11月 5日	監事監査	3月7-11日	(Web開催)北海道農業試験会議設計会議
11月 8日	第4回農研本部場長会議	9日	(Web開催)オホーツク地域農業気象連絡協議会
16日	(Web開催)第6回本部長会議	3月14-	(書面開催)北見農試現地委託試験設計検
18日	第7回訓子府まちづくり推進会議	25日	討会
18日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会	15日	(Web開催)北海道農業試験研究推進会議本会議
24日	(Web開催)道産小麦品質向上プロジェクト試験成績検討会	17日	(Web開催)オホーツク地域農業技術支援会議・五者会議
25日	(Web開催)馬鈴しょ輸入品種等選定試験及び育成系統連絡試験成績検討会		
26日	(Web開催)てん菜輸入品種検定試験等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会		

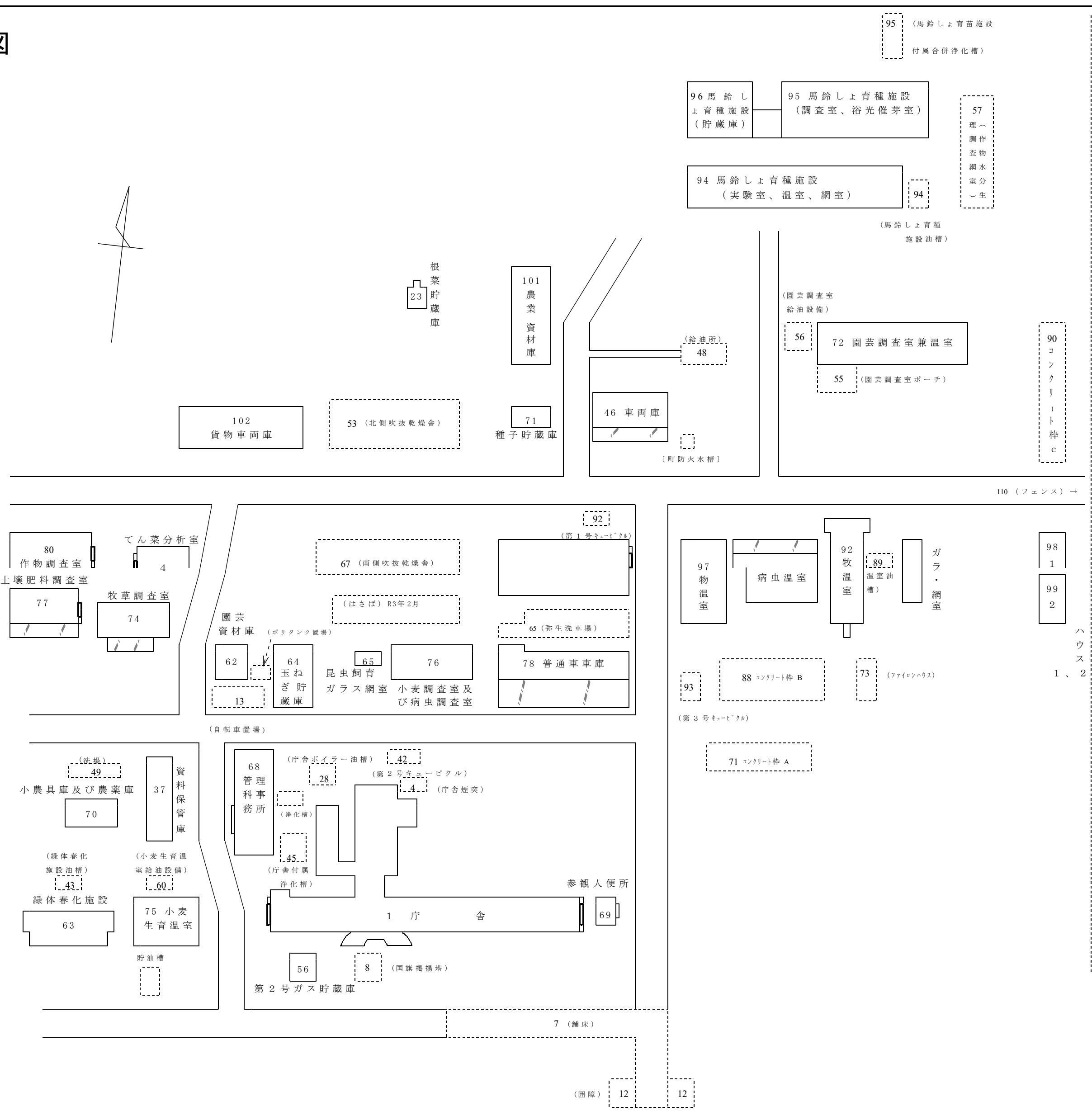
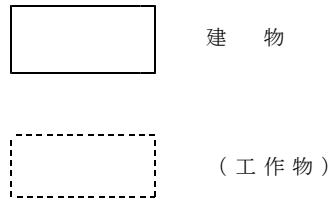
月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
18日	(Web開催)第10回本部長会議		
22日	(Web開催)第6回農研本部場長会議		
31日	辞令交付式(退職・異動・再雇用)		

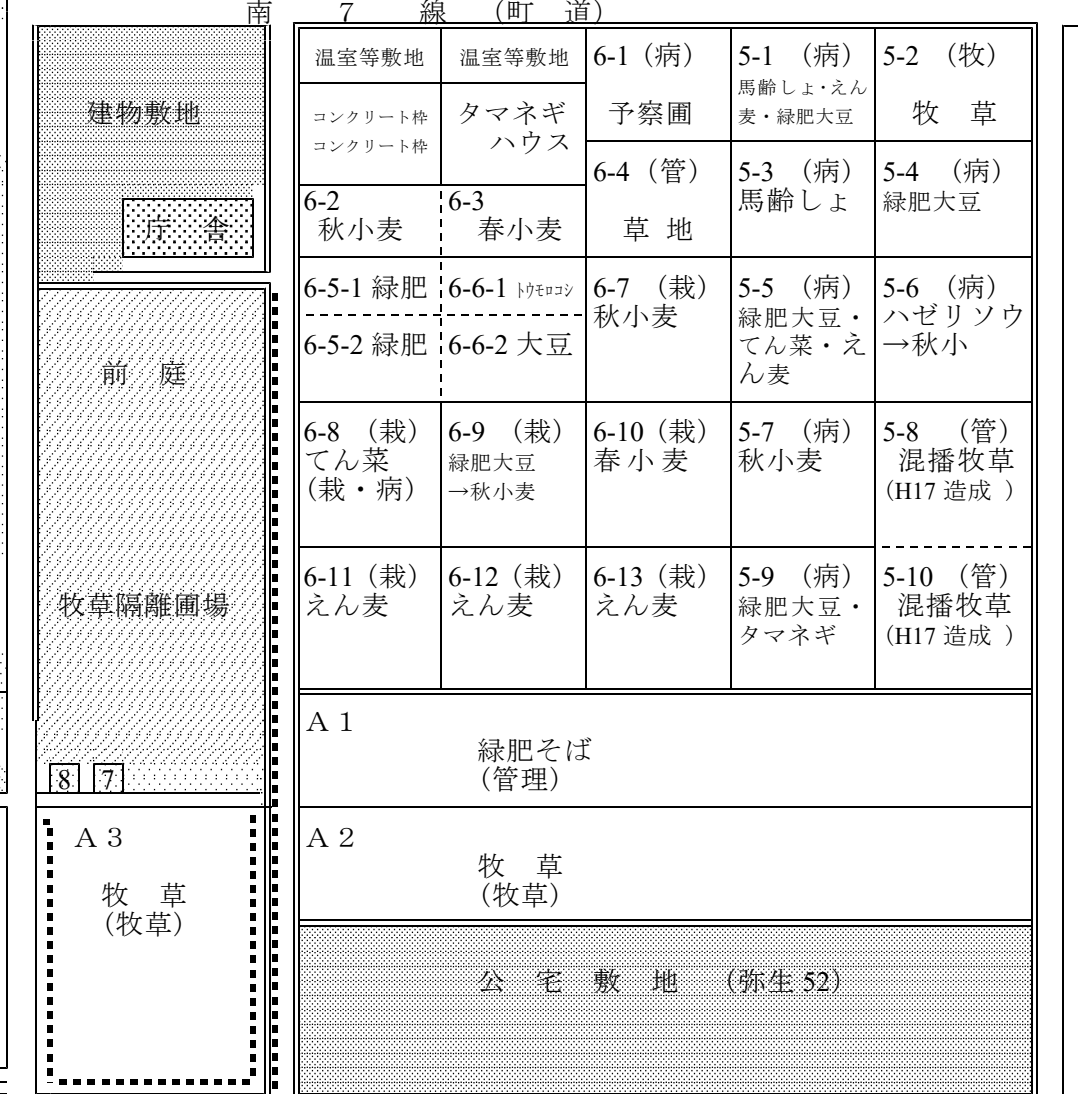
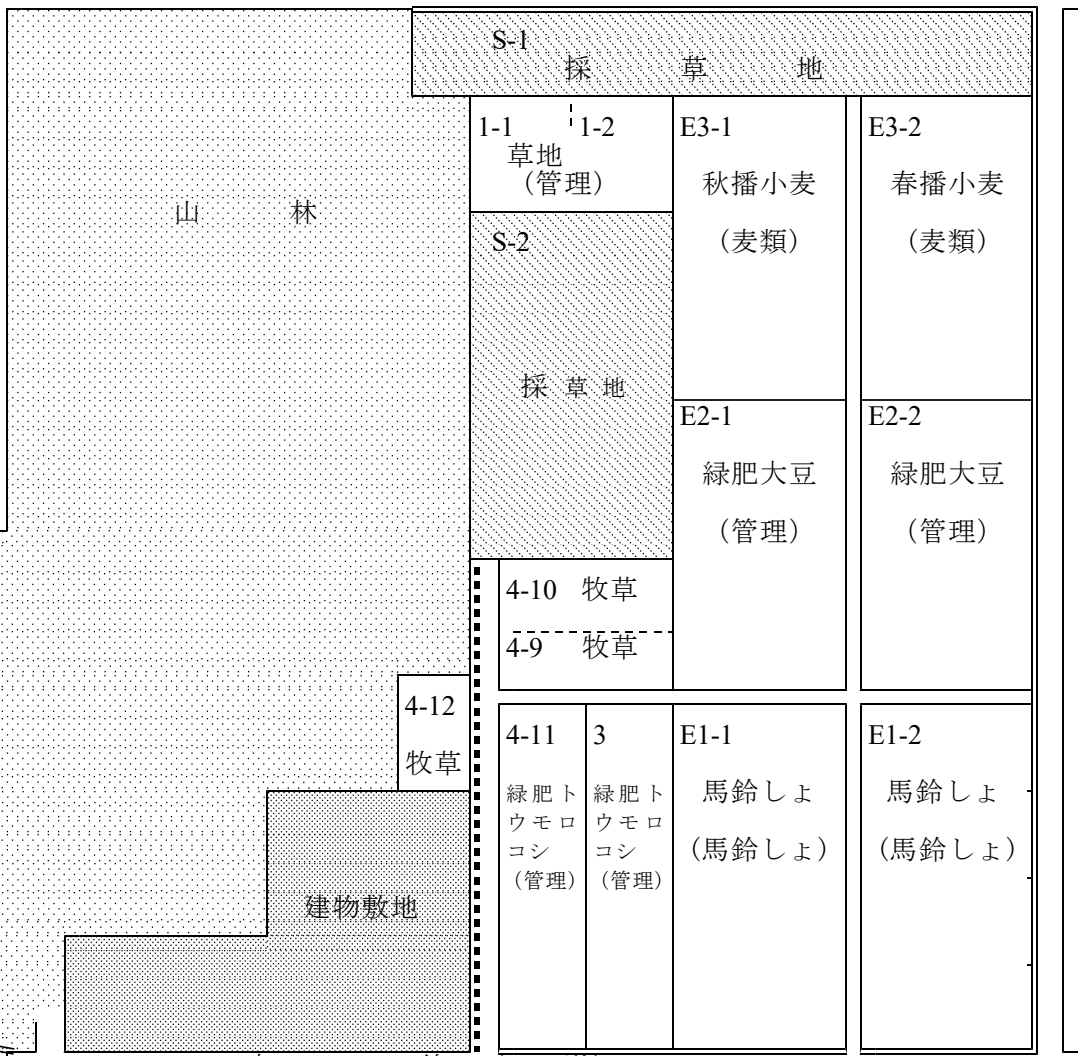
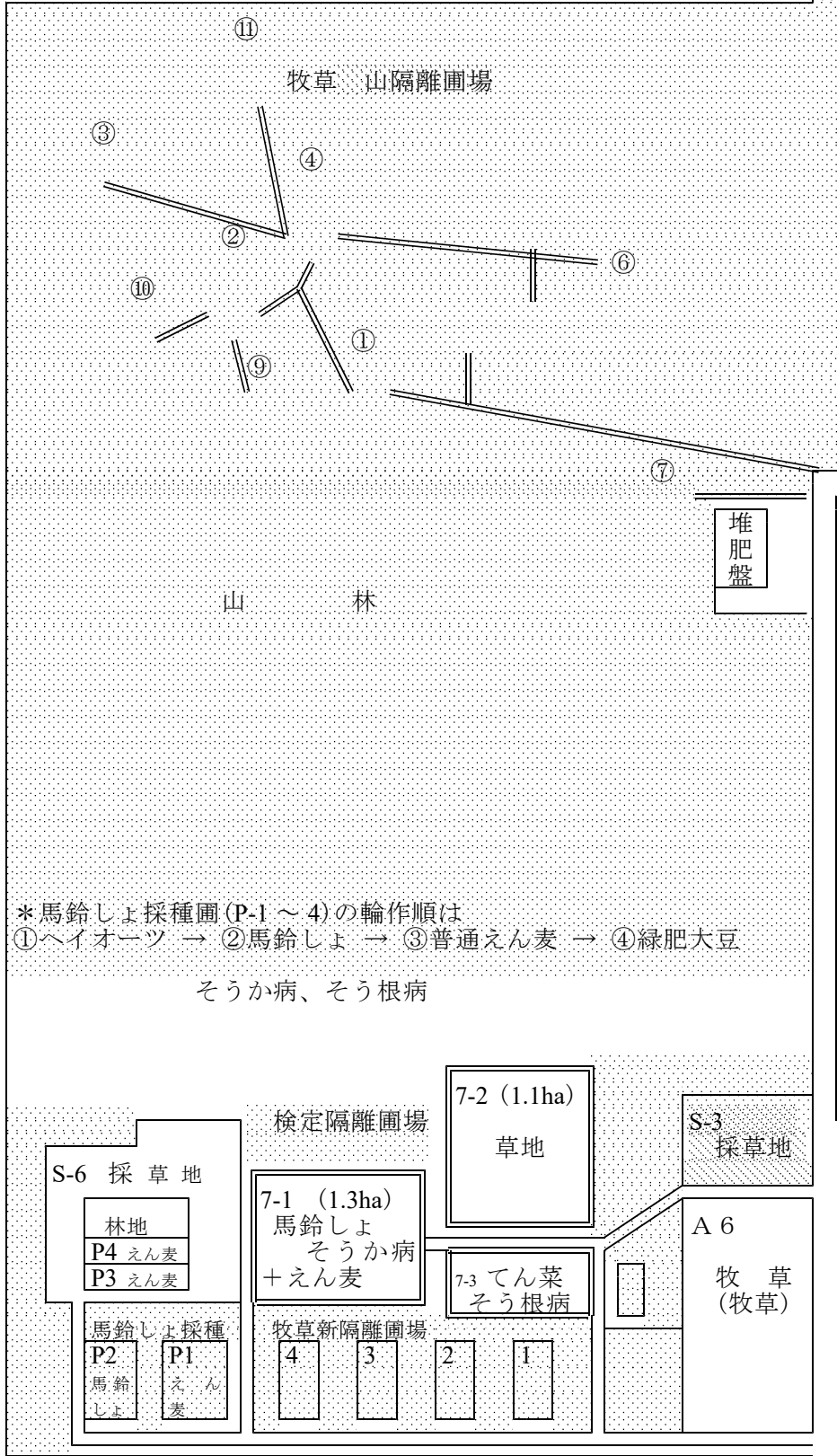
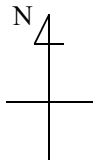
5 自己点検への対応

事 項	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
研究成果発表会の開催件数	1	2	0	2	1	1	3	2	1(web)	1(web)
研究成果発表会への延べ参加人数	189	247	0	496	169	136	673	325	938(視聴)	492(視聴)
研究会等の開催件数	2	4	0	0	1	1	1	0	0	0
研究会等への延べ参加人数	319	650	0	0	39	97	60	0	—	—
発表会・展示会等への出展件数	8	1	0	2	1	2	3	0	1	2
研究報告書の発行状況	7	6	4	4	2	4	—	3	0	0
技術資料の発行状況	2	1	1	1	4	1	—	2	2	0
学会やシンポジウム等での発表件数	39	47	24	36	33	20	25	24	10	17
学術誌や専門誌への投稿論文数	13	18	17	10	16	11	9	9	5	7
普及組織との連絡会議等開催件数	12	40	59	9	9	10	5	3	4	5
技術相談件数	70	88	43	66	85	89	85	76	84	94
技術指導件数	178	175	148	78	56	55	53	59	55	33
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	26	32	16	15	31	30	17	20	22	15
研究成果の公表・活用状況(書籍)	11	1	6	1	2	2	1	3	9	5
研究成果の公表・活用状況(新聞)	6	4	8	2	7	3	5	3	8	2
技術審査件数	1	2	1	1	1	0	1	0	0	0
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利用者意見把握調査の回答数	116	182	48	94	180	115	145	55	—	—
研究会・講習会等の開催件数	0	2	14	0	2	2	3	1	1	0
研究会・講習会等の延べ参加者数	0	11+?	1,200	0	520	308	40	100	27	0
研修者の延べ受入人数	5	16	10	2	0	0	28	8	2	0
特許等の出願件数	2	1	0	0	1	1	3	2	2	0
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
視察者・見学者の受入件数	45	61	33	26	37	38	25	35	0	0
視察者・見学者の延べ人数	668	855	512	371	603	648	359	575	—	—
学会等役員・委員等件数	6	11	12	14	17	9	12	9	12	6
国際協力事業等への協力件数	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	29	21	25	37	28	20	6	10	0	0
市町村との意見交換等の開催件数	4	13	3	16	5	8	2	0	0	0
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	6	7	6	6	3	4	8	6	0	0
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
企業等への訪問件数	44	35	20	18	22	18	29	38	2	3
関係団体等との意見交換等の開催件数	25	29	25	38	24	29	43	9	3	2

6 北見農業試験場建物配置図

土地の所在 常呂郡訓子府町字弥生52番地





至置戸 南 8 線 (道 道) 正門 至北見

B 6-1 トウモロコシ (牧草)	B 5 緑肥普通 えん麦 (管理)	B 4 てん菜 (畑作)	B 3 緑肥ヘイ オーツ (管理)	B 2 緑肥ひま わり (管理)	B 1 緑肥ひま わり (管理)
B6-2 草地					
B6-3 牧草・え ん麦 (牧草)					

A 5 混播草地 (管理) トールフェスク+ 白クローハ (H20 造成)	A 4 混播草地 (管理) トールフェスク+ 白クローハ (H20 造成)	D 3 緑肥そば (管理)	D 2 緑肥そば (管理)	D 1 緑肥大豆 (管理)	林地 (沢) S-4 採草地
--	--	---------------------	---------------------	---------------------	-------------------------

C 6 豆類 (畑作)	C 5 緑肥トウ モロコシ (管理)	C 4 春播小麦 (麦類)	C 3 馬鈴しょ (馬鈴しょ)	C 2 秋播小麦 (麦類)	C 1 秋播小麦 (麦類)
-------------------	-----------------------------	---------------------	-----------------------	---------------------	---------------------



至置戸 旧ふるさと銀河線 至北見

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 令和3年度

令和4年7月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
